2016 年度　第 1 回
東京学芸大学ヒューマンライブラリー
報告書

「未来の子どもに伝えたいこと」

2017 年２月

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016 実行委員会

代表：留学生センター　岡　智之

目次

はじめに……2
ヒューマンライブラリー開催概要、企画概要……4
広報物（ちらし、バナー）……7
当日パンフレット、資料…… 10
　ご利用手順…… 11
　ブックリスト…… 12
　タイムスケジュール、会場配置図…… 14
　利用登録書…… 16
　「本」の皆様へ…… 17
当日までの準備と当日の活動…… 18
来場者数と内訳…… 22
当日の貸し出し状況…… 23
読者から「本」へのメッセージカード…… 24
「読者」として参加した感想…… 26
会計報告…… 28
読者・「本」アンケート調査…… 29
　１．グラフ…… 29
　２．自由記述…… 39
振り返り会で出たスタッフの意見…… 43
実行委員会スタッフの感想レポート…… 45
　学生の感想…… 45
　教職員の感想…… 50
終わりに―ヒューマンライブラリーを運営して…… 54

はじめに

2016 年 12 月 4 日（日）、東京学芸大学で初めてのヒューマンライブラリーが開催されました。ヒューマンライブラリーは、2000 年にデンマークでリビングライブラリー（生きている図書館）として初めて開催され、ヨーロッパを中心に北米、オーストラリア、アジア（マレーシア、タイ）など 60 か国以上で、日本では、2008 年以来、駒澤大学、明治大学をはじめとした大学や NPO、個人などによって開催され、全国に広がりつつあります。

ヒューマンライブラリーでは、在日外国人や障がい者、セクシュアルマイノリティなど、誤解や偏見を受けやすい人々を「生きている本」として貸し出します。読み手は普段あまり触れ合う機会の少ない「本」を借りることで、当事者から直接話を聞くことができ、自分の持っている固定観念に気づき、新たな視点を得る機会となります。こうして、差別・偏見や誤解の低減、多様性に開かれた社会の実現を目指すのが、このイベントの目的です。

筆者は、ヒューマンライブラリーを、異文化間教育学会の横田雅弘先生（明治大学）を通して知り、明治大学のヒューマンライブラリーに何回か参加する中で、いつか学芸大学でも開きたいと考えていました。今年は、10 月に坪井健先生（駒澤大）や横田先生の呼びかけで、ヒューマンライブラリー研究大会が開かれ、全国で多様な形でヒューマンライブラリーが行われていることを知りました。ヒューマンライブラリーは、本部のもとで何か同じように行われなければならないというものではなく、基本的な趣旨に賛同するならば、色々な形で行っていける自由度の高いものだということも実感しました。

筆者は、留学生センターの教員として、日頃、留学生の日本語教育やサポート、日本人学生との交流活動などを行っていますが、2015 年度からは日本人と留学生が共に学ぶ「多文化共修科目」を担当する機会を得、在日外国人問題などを中心に異文化理解を深める活動も始めました。この中で、異文化理解や多様性などを考える場合、障がい者やセクシュアルマイノリティの問題なども重要視して取り上げなければならないと考えました。そうした問題は私にとってもこれから勉強しなければならない分野だったため、学芸大の学生支援部署の協力を得ながら、学生たちと共に学ぶ姿勢で、取り組みを行いたいと考えるようになりました。幸い、学芸カフェテリアをはじめ、障がい学生支援室、男女共同参画支援室の教職員、学生の皆さんと毎学期「学生サポーター説明会」などで共同で活動する機会があり、まず、ここから呼びかけを始め、賛同してくださった方々で 7 月に「実行委員会」を立ち上げるに至りました。

実行委員会立ち上げ当初の 7~9 月の過程では主に教職員主体に、基本コンセプトの確認、企画概要、具体的な「本」探しと交渉などを進めていきました。最初のテーマの設定の議論の中で、教育系大学の学芸大でやる独自性を出したいという意見が出され、将来教員や教育支援者になる学生に対して、「未来の子どもに伝えたいこと」を「本」の方々からお話し頂こうということでこのテーマになりました。また、差別偏見を受けやすいマイノリティだけではなく、学生のキャリア支援にも役立つように、ユニークなキャリアを持った方というカテゴリーを入れることになりました。

10 月の秋学期の開講を待って、学生への呼びかけと学生スタッフの募集を開始しましたが、説明会では多くの学生が参加してくださり、その中からスタッフをやりたいという学生も数名出てきました。また、筆者が担当する授業「多文化共修科目 B」の課外活動として、学生たちに呼びかけ、3 名がスタッフになってくれました。詳しい準備過程は、本文を参照していただきたいですが、美術専攻の学生がすばらしいデザインでチラシ、ポスター、バナーを作ってくれたり、Facebook や Twitter などでの宣伝をやっていただいたり、様々な方々の協力があり、開催にまでこぎつけることができました。

当日は、「本」の方 12 人、スタッフ 14 人、読者 20 人、メディア 1 人の計 47 人と若干少なめではありますが、充実した会となりました。1 回目ということで様々な反省点がありますが、参加した方々はそれぞれほとんど参加してよかったという感想を述べてくれていました。特に、対話を通して、「本」の方々をカテゴリー（LGBT、〇〇障がい者など）ではなく、個性のある〇〇さんとして交流できたことがこのイベントの最大の特徴であり、成果だと考えます。今回の反省を踏まえ、来年度以降も引き続きこのような取り組みを継続していきたいと考えております。今回参加いただいた「本」の皆さん、スタッフの皆さん、読者の皆さん、協力いただいた方々すべてに心よりお礼を申し上げるとともに、以降のヒューマンライブラリーに、より多くの方々が積極的に参加、ご協力いただければ幸いです。

2017 年 1 月

ヒューマンライブラリー実行委員会代表

岡　智之（留学生センター）

東京学芸大学ヒューマンライブラリー
～未来の子どもに伝えたいこと～

開催概要

ヒューマンライブラリー（生きている図書館）とは

私たちの世界には、お互い異なる文化的背景や心・身体を持った多様な人々が生活しています。こうした多様な人々への気づきとそれらの人々との対話・交流を通じて、多様な生き方を認め合う、多様性に対して開かれた社会の実現を目指す試みがヒューマンライブラリーです。ヒューマンライブラリーは、2000 年にデンマークで始まり、欧州を中心に北米、オーストラリアなど世界各国で行われています。日本でも、2008 年以来、駒澤大学、明治大学などの大学や多様な団体、個人により全国で行われています。今回、東京学芸大学で開催されるヒューマンライブラリーで「本」になってくれる方は、現在交渉中ですが、在日外国人・留学生、セクシュアルマイノリティの方、障がい者本人・支援者、ユニークなキャリアを持った方など多種多様な方々を予定しています。　なお、ヒューマンライブラリー開催理念から、本イベントはすべて非営利目的のボランティア活動です。したがって「本」となる方もボランティア参加となります。イベント内で企業や団体の宣伝はできませんが、名前を明示した善意の寄付や協賛金は受け付けることができます。

記

- 開催日時：2016 年 12 月 4 日（日）12 時半から 16 時まで（12 時受付開始）
- 開催場所：東京学芸大学（東京都小金井市貫井北町４－１－１）第 2 むさしのホール
- 主催団体： 東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016 実行委員会（代表：岡 智之）
- 後援：小金井市教育委員会　協賛団体：東京学芸大学教職員組合、生活協同組合

協賛金寄付のお願い

本企画はすべてボランティアによって行われ、運営（広報・宣伝・実施・報告等）や「本」としての協力者の交通費等もすべて協賛金寄付によってまかなわれます。皆様方におかれましては、本イベント開催の意義にご理解いただき、協賛団体・寄付者氏名にお名前を連ねていただき、協賛金寄付にご協力いただければ幸いです。なお、ご寄付いただいた方々には、後日、開催成果報告をさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

記

寄付金額：　団体の場合（1 口 2 万円）　個人の場合（1 口 2 千円）

寄付いただきましたら、受領証をお渡しします。

協賛団体・個人名等は、当日配布のプログラムに記載し、謝意を表します。

企画内容の概要

1．企画理念・目的

・生きている「本」と読者との対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に開かれた社会の実現を目指す。

・差別や偏見のある社会に対して問題意識を持ち、すべての人が平和に暮らし、お互いを尊重しあえる社会の実現を目指す。

・教員、教育支援者になる学生に対して、「本」となる協力者から未来の子どもたちに伝えたいことを語ってもらう。

・大学構成員、地域住民と「本」となるマイノリティなどの方を結び付ける試みとして開催する。

2．企画内容

在日外国人・留学生、セクシュアルマイノリティ、障がい者本人・支援者、ユニークなキャリアを持った方などに「本」として来ていただき、彼らの話を聞きたい方と引き合わせて、個人的体験などについて、約 30 分単位で数回語っていただく対話のコーナー（1 人につき 2～3 人の聞き手）を中心に、事前に用意したミニ講演会やワークショップも数回開催する予定。

3．本イベントの主たる対象者

東京学芸大学の教職員、学生、そして地域住民をはじめ、基本的に、本イベントの趣旨にご賛同いただける方なら、誰でも参加できる。

4．「本」としての協力予定者

現在、候補者をあげて、交渉の最中であるが、最終的に 10～15 名程度の協力者を確保する予定である。

５．開催費用

準備過程でのすべての費用は、スタッフのボランティア活動による。「本」としての参加協力者も、基本的にはボランティア参加を条件とする。ただし、交通費（程度の謝金）は主催者が用意する。終了後、「本」、「参加者」、スタッフによる交流会を開催する。

６．開催費用の収集方法

協賛団体の協賛金・個人の寄付。

７．注意事項

ヒューマンライブラリー開催の理念により、特定団体の宣伝や営利目的で開催することはできません。従って、本イベントも営利目的や宣伝目的での参加はご遠慮願います。

８．連絡先　：東京学芸大学留学生センター　岡　智之研究室（N 棟２F）

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町４－１－１

Tel&Fax. 042-329-7235　e-mail: okatom@u-gakugei.ac.jp

広報物（チラシ、バナーなど）

ヒューマンライブラリー（生きている図書館）とは

ヒューマンライブラリーは、生きている「本」と「読者」との対話を通して、
多様な生き方を認め合う、多様性に対して開かれた社会の実現を目指す試みです。
2000年にデンマークで始まり、世界各国に広がっています。
日本でも、2008年以来、駒澤大学、明治大学などの大学や多様な団体、個人により全国で行われています。
東京学芸大学では、今回、「未来のこどもたちに伝えたいこと」をメインテーマに開催します。
どうぞお気軽に「読み」にいらしてください。

「本」としての協力者（下のような方々と1回30分間、対話できます。）

イスラム教徒の留学生、難民、外国につながる人々の支援者、
セクシュアルマイノリティ、性分化疾患の方、
双極性障がいの方、発達障がいの方、児童生徒の学習支援者、留学関連の仕事をする方など
（東京学芸大の留学生や卒業生、学生支援団体などの協力を受けております。）

協賛金寄付のお願い

本企画はすべてボランティアによって行われ、運営費用はすべて協賛金寄付によってまかなわれます。
皆様方におかれましては、本イベント開催の意義にご理解いただき、
協賛金寄付にご協力いただければ幸いです。
なお、ご寄付いただいた方々には、当日配布のプログラムにお名前を記載させていただき、
後日、開催成果報告をさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。
協賛金寄付に賛同いただける方は代表 岡(okatom@u-gakugei.ac.jp)までご連絡ください。

大学正門から会場までのマップ

交通
アクセス

バナー（大生協前）

imuraya
あんまん
井村屋
東京学芸大学
ヒューマン
ライブラリー
ー未来の子どもに
伝えたいことー
HUMAN
LIBRARY
TGU
12月4日〔日〕
12:30 ～ 16:00
（12 時受付開始）
東京学芸大学第２むさしのホール
主催：東京学芸大学ヒューマンライブラリー 2016 実行委員会（代表：岡　智之）
後援：小金井市教育委員会・社会福祉協議会
協賛：東京学芸大学教職員組合・生活協同組合
問い合わせ先：東京学芸大学留学生センター
岡　智之（N 棟 2 F）okatom@u-gakugei.ac.jp

当日パンフレット

東京学芸大学
ヒューマンライブラリー
～未来の子どもに伝えたいこと～
プログラム

日時：2016 年 12 月 4 日（日）12 時半～16 時（12 時受付開始）

場所：東京学芸大学　第 2 むさしのホール

ごあいさつ

本日は、「東京学芸大学ヒューマンライブラリー」にお越しいただきありがとうございます。２０００年デンマークで開催されて以来、ヒューマンライブラリーは、現在までに約 70 ヵ国で開催され、わが国でも 40 回以上開催されている異文化理解のイベントになっています。

東京学芸大学では今回、「未来の子どもに伝えたいこと」をテーマに 11 冊の「本」の方を迎えて、開催することになりました。本日は、「生きた本」との対話を心ゆくまでお楽しみください。

主催者一同

主催：　東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016 実行委員会（代表：岡　智之）
後援：　小金井市教育委員会・社会福祉協議会　協賛：　東京学芸大学教職員組合・生活協同組合
お問い合わせ先：　東京学芸大学留学生センター　岡　智之（〒184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）
電話&Fax：042-329-7235 / e-mail：okatom@u-gakugei.ac.jp

ご利用手順

1. 裏面の「利用上のお願い」をお読みいただき、ご同意いただける場合、「利用登録書」に必要事項を記入いただきます。
2. 次に、見開きページのブックリストとタイムスケジュールを参照の上、本日借りたい「本」の番号・名前と時間帯を記載し、貸し出しカウンターにお渡しください。「予約票」をお渡しします。なお、講演は予約なしに参加できます。
3. 予約された時間帯の 5 分前までに、対話コーナーの指定の机（「本」の名前が表示されています）までお越しください。（＊なお、車いすの方は、1F で対話のコーナーを設置します。）
4. 対話の時間は、30 分です。終了 10 分前にタイムキーパーが連絡いたします。終了時間が来ましたら、それ以上質問などなさらずに、すみやかに終了ください。終了後、「本」の方への簡単なメッセージをお願いします。
5. 対話以外の時間は、2F の読者控え室にておくつろぎください。
6. 16 時 10 分から 1 F で、本の方・読者の方・スタッフの交流会を行います。よろしければご参加ください。

利用上のお願い

1. 「本」の方を傷つけるような言動をしないでください。
2. 主催者並びに「本」及び同席者に無断で、写真撮影や録画、録音はしないでください。
3. 「本」の方の個人情報を許可なく、ネットや印刷物にして公開しないでください。
4. 「本」の方の身体的・精神的都合で閲覧中に貸し出し中止になることもあります。
5. スタッフやメディアが写真撮影や取材に伺うことがあります。取材や映るのを避けたいという方は受付（又はその場）でお申し出ください。

【ブックリスト】本日お話しくださる「生きた本」の方々です。

・対話メイン会場（第 2 むさしのホール 2F）、講演会会場（第 2 むさしのホール 1F）

＊（HP 版では個人情報となる「本」のお名前は削除させていただきました）

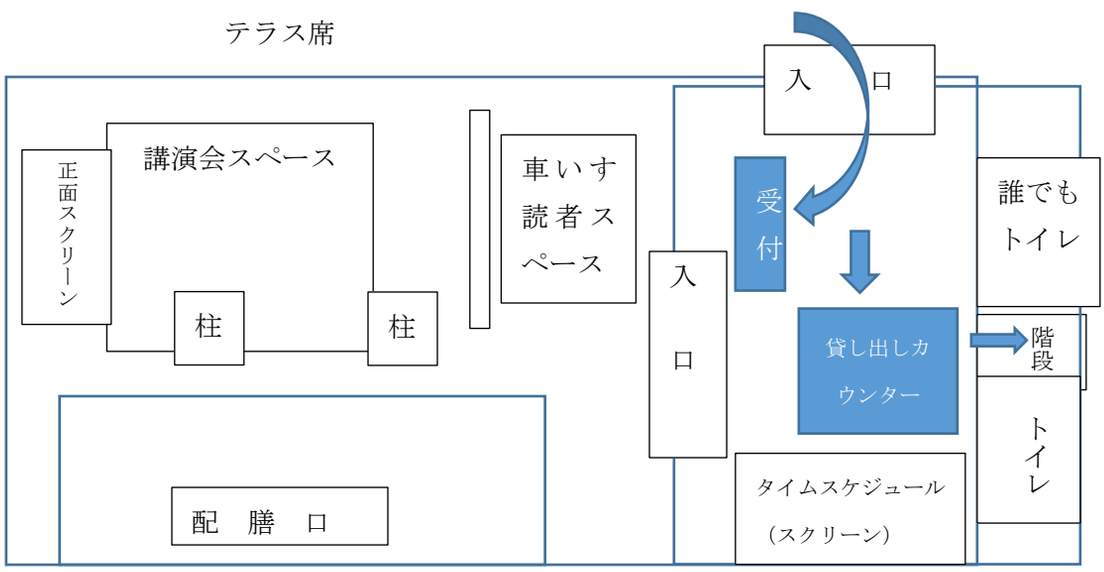
	作者名	タイトル	あらすじ
①		イスラム教のルールと必要となる設備	二つのイスラム教のルールを紹介させて頂きたいと思う。礼拝と食事のルールである。ムスリムの人は毎日５回礼拝しなければならない。イスラム教の中ではハラールとハラムの食べ物がある。ハラールの食べ物は食べても良い食べ物であり、ハラムの食べ物は食べるのが禁じられている食べ物である。
②		クルド人問題と在日クルド人難民	皆さんは、クルド人について知っていますか？　本日は､クルド人とクルドの歴史と文化について述べた後、なぜクルド人が難民になったのか、そして日本のクルド人の問題についてお話しします。
③		居場所を探して～外国につながる子どもたちとの 6 年間	外国につながる子どもっていったい誰のことでしょうか。外国人？外国うまれ？外国語を話す？日本語を知らない？多様な子どもたちが日本にも暮らしています。三鷹の小さな学習支援教室での日々の出来事を通じて、外国につながる子どもたちの生きづらさと、そのための教室の意義をお話しします。
④		性と生　～「ありのまま」を考えよう～	小学生のころからなんとなく“周りと違う”と感じてきた。自分がわからずモヤモヤした中学校生活。わからないなりに、がむしゃらだった高校生活。そんな 1 人の人間が大学で仲間と出会い「ありのままの自分」を受け入れるまでの過程と、現在、教師として生徒と向き合う中で感じる「葛藤」を語ります。
⑤		「自分らしく」を探して	大人になったら、自分は男になると思っていた小学校時代。同性に恋愛感情をいただいていることに気づき、失望した中学時代。初めて自分のことを打ち明けたカミングアウト。
⑥		男でも女でもある境界線で谷間な生き様	性分化疾患って知っていますか？おおよそ 60 以上あるこれらの特性の中、僕は生まれた時に男性仮性半陰陽という特性で生を受けました。特性？疾患？谷間のセクマイ？男でも女でもある両方の体の特徴を持って生まれてきた比較的重い話を楽しいエピソードも含めて、お話ししますね。

⑦		「ＡっＤｅも、Ｈｏんの少し、Ｄｅきたかも。」	転校初日に男の子を殴る子が、子どもと同レベルで遊ぶ大人になってしまった！個性的、変わってる、おっちょこちょい、うに、残飯…そんな風に言われる、超気分屋な私を読んでみませんか。 ※手話少しできます、English available a little
⑧		発達障害当事者と「違い」について考えよう！	発達障害の当事者が自身の成育史の振り返りを通して考えた必要な支援について、そして他の当事者と関わる中で気づいたことについてお伝えします。人間は誰しも「違い」を抱えていると思います。発達障害もその一つではないでしょうか。「違い」のある私たちがどうやって生きていけば良いか、一緒に考えてみませんか？
⑨		挫折を挫折と感じない海外好きな私	心が折れそうになったことはありますか。私は周囲ではそんなふうに思われてましたが、実はタフに生きてきたとひとりです。ごく普通な生活から、小学 6 年で父を突然失い、中学 1 年でカンボジアの地雷原へ当時最年少で入り、生徒会役員として中高バリバリ動き、大学ではボランティアに奮闘する中、初めての人間関係のこじれを経験し、そしてメキシコへ留学し…。海外へ気持ちを向けてリラックスしながらおしゃべりしましょう！
⑩		ナナメの関係によるキャリア学習支援	現在、カタリバという NPO で働いています。学芸大では学校教育選修で、幼少中高の免許を取っては先生にならず、社会人教育の分野の民間企業へ。その後、結婚、息子を授かったことを経て、一念発起で NPO へ転職。東京で働いていたと思いきや、3 ヶ月前にいまは単身、福島へ。そんな自分の人生の断片を語りつつ、いま取り組んでいる、ナナメの関係によるキャリア学習支援についてお話します。
⑪		「ああ～」「わかりません」「治りません」	37 歳で難病のひとつである「膠原病」になりました。膠原病とはどのような病気で、日常生活ではどのようなことが問題になるのか？ひとりの当事者の視点から考えてみたいと思います。

タイムスケジュール

机番号	作者名	第１回 (12:30-13:00)	第２回 (13:30-14:00)	第３回 (14:30-15:00)	第４回 (15:30-16:00)	交流会 (16:10-17:00)
①						
②			講演 13:10			
③						
④						
⑤						
⑥						
⑦						
⑧				講演		
⑨						
⑩						
⑪						
1F	講演	13:10-14:00		14:30-15:20		交流会

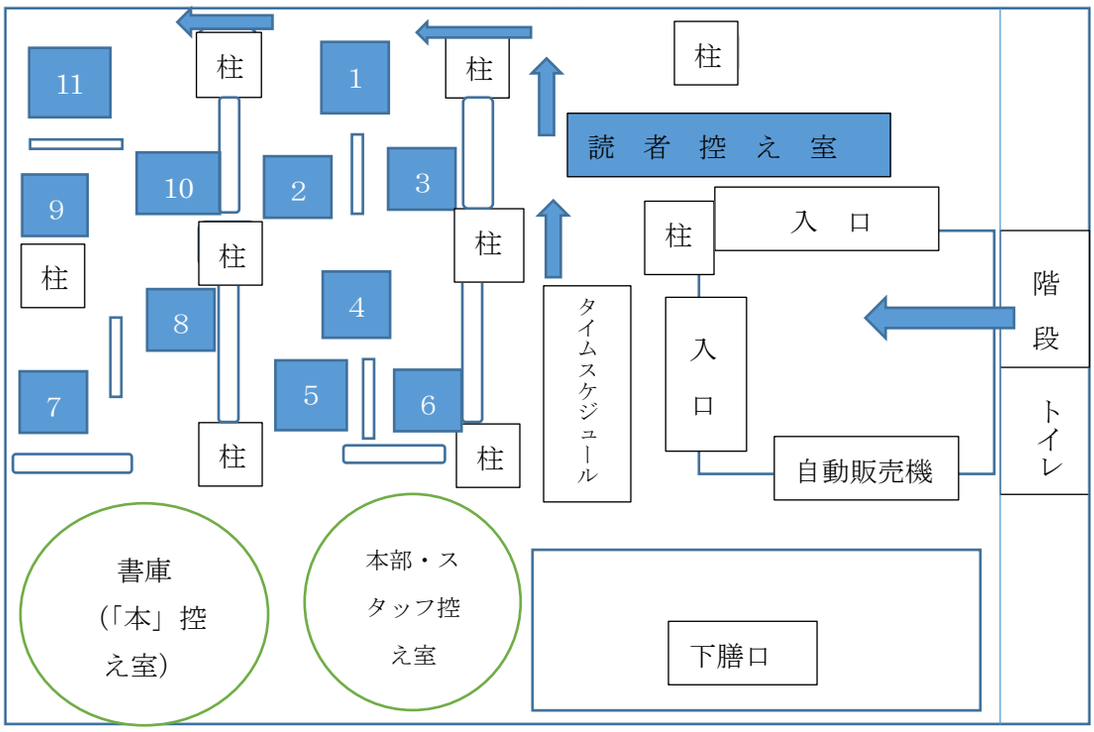
会場配置図　第２むさしのホール（１F）



第 2 むさしのホール 2F

1~11 「本」の番号

窓側



協賛金をいただいた団体・個人の方【順不同・敬称略】

＊ご協力ありがとうございました。

★　当日カンパも受け付けております。よろしくお願いいたします。

スタッフ（協力者）一同

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016

2016 年 12 月 4 日

利用登録書

利用登録書は、「生きている本」に気持ちよく話していただくために、読者の方全員に記入をお願いしております。プログラム 2 ページ目の「利用上のお願い」をお読みいただき、同意いただけましたら、下記に必要事項の記入をお願いいたしております。(＊のアンケート事項は回答は自由ですが、できる限りお願いします。) 記入いただけましたら、本日借りたい「本」を選んで、下に記載し、貸し出しカウンターにご提出ください。「予約票」をお渡しします。ご記入いただきました利用登録書の個人情報は、本イベントの登録とその後の報告書作成・案内送付の目的以外には使用いたしません。よろしくご協力お願いいたします。

氏名（ふりがな）：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご職業（ご所属）等：

東京学芸大学の方：学生（専攻・学年　　）教職員（　　）

東京学芸大学以外の方：学生（学校名　　）、

教員・会社員・自営業・その他（　　）

ご住所：〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

連絡先（ファイルが添付できる e-mail アドレス。報告書や次回開催のお知らせを送ります）：

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊本日、このイベントをどのようにお知りになりましたか。（下記から〇をおつけください）

大学内のポスター・チラシ、学内ポータルのお知らせ、友人・知人・先生からの紹介、

主催者の Web 情報（ニュースレター、メール、facebook など）、主催者以外の Web 情報、

学外のチラシ・ポスター（場所：　　）

その他（　　）

＊本日、このイベントに参加しようと思った動機や期待は何ですか。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました！

本日借りたい「本」

第 1 回　12:30-13:00（　　）、第 2 回　13:30-14:00（　　）

第 3 回　14:30-15:00（　　）、第 4 回　15:30-16:00（　　）

講演第 1 回　13:10-14:00 , 講演第 2 回　14:30-15:20

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016

2016 年 12 月 4 日

「本」の皆様へ

本日は、私どもの主催するヒューマンライブラリーにご協力くださり、誠にありがとうございます。「本」の方々、「読者」の方々がお互いに気持ちよく交流していただけるよう、下記に注意事項を記しますので、ご覧の上、ご確認お願いいたします。

1．本の 1 回の貸し出し時間は 30 分です。貸し出し時間になりましたら、対話スペースの所定の番号の机にお座りくださり、対話を始めていただきます。尚、車いす使用の「読者」がいらっしゃった場合、1F の車いすスペースに移動していただく場合があります。
2．「読者」の質問には、差しさわりのない範囲で自由に答えていただいて結構です。質問を拒否することもできます。また、その場で気分が悪くなられたり、また、不快な思いをされた場合には、特に理由を説明することなく、退場することもできます。その際、対話スペースのスタッフにひとことお声をおかけください。
3．貸し出し時間終了の 10 分前に、スタッフがお声かけしますので、時間内に対話が終わるようにお願いいたします。
4．対話の時間以外は、書庫（「本」の控え室）でおくつろぎください。お茶やお菓子も自由にお召し上がりください。
5．本の方による無断での写真撮影、録画・録音はお断りいたします。ご希望の場合は、スタッフまでご相談ください。
6．本日、腕章をつけているスタッフ、読売新聞による写真撮影、取材が行われます。取材や映るのを避けたいという方は、スタッフまでお申し出ください。
7．16 時 10 分から、本の方・読者の方・スタッフで交流会を行います。よろしければご参加ください。
8．その他、なんでもスタッフの方に、ご相談ください。

主催者一同

当日までの準備と当日の活動

実行委員会立ち上げから

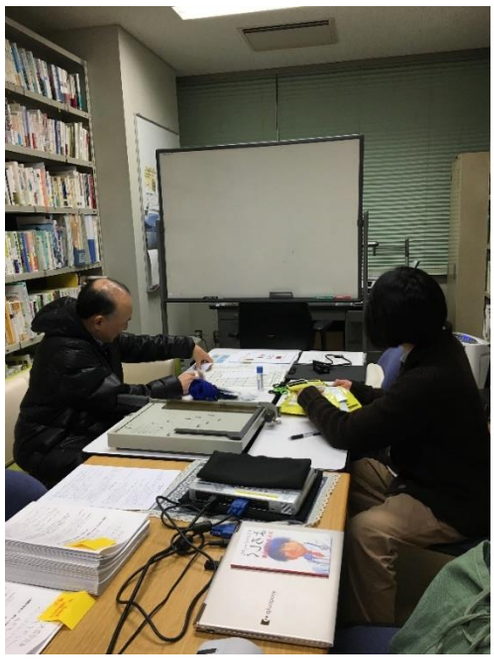
- 2016年7月　1日（金）実行委員会立ち上げ打ち合わせ会、15日（金）会議
  ー日時場所の決定、企画書の作成、テーマの決定
- 8月　4日（木）会議―「本」への交渉開始、協賛の依頼（生協、教職組）
- 9月　7日（水）会議―「本」交渉中間報告、後援の依頼（小金井市教育委員会、社会福祉協議会)、市報への掲載依頼、28日（水）会議―「本」の決定。
- 10月　9日（日）ヒューマンライブラリー研究大会（明治大学)
  12日（水）会議。宣伝準備。学生への呼びかけ開始。
  21日（金）昼　学生スタッフ募集説明会
- 11月　7日（月）会議―チラシ、ポスター作成、配布
  14日（月）会議―バナー作成・設置、SNSでの宣伝
  22日（火）4限　会場下見、会場設営の段取りと具体的準備

当日までの具体的準備

・案内板（外3か所）→広報
・受付　タイムスケジュールA3番（印刷)、オセロ表（PC共有ファイル)、予約票
・プロジェクター・スクリーン・PC・延長コード
・2Fの張り紙（ブース番号、入り口)、対話の机に置くネームプレート、スタッフ腕章の中身作成
・STAFF腕章15個購入(¥1500)、「本」ネーム
・バナーデータ作成、印刷、バナースタンド設置
・Facebook, twitterの更新
・バナーを正門前,第2むさしのホール前に設置していいか確認
・当日のスタッフのお弁当手配(¥1000×15)・マスク購入（12)

前日準備（12/2（金）　4限・5限）

・スタッフ腕章の中身を腕章の中に入れる。
・足りない張り紙を準備。
・ネームプレート準備。
・プログラムを半分に折り、利用登録書、アンケートを挟み込む。
・お茶・コーヒー・お菓子、紙コップ、お皿などの買い出し（￥5000 程度）。
・「本」の交通費準備（￥2000×12）。袋に名前を書く。
・学務課からマイク（3 本）とアンプ、延長コードを借りる。　2 日 18 時～5 日（月）8 時半までに返す



当日準備・進行

9:40　バナーを正門前と会場前に運ぶ。外の案内板を設置。

岡研究室から必要な備品を会場に運ぶ。（プログラム・利用登録書・アンケート一式、ネームプレート、腕章、張り紙、本用ネーム、模造紙、Easterpad, 養生テープ、マジック、筆記用具、安全ピン、ビデオ、三脚、アンプ・マイク）、プロジェクター・スクリーン・PC・延長コード（各 3 台。留学生センター、男女共同参画支援室、障がい学生支援室）、ホワイトボード、間仕切り 2、ポット 2（留学生センター）

10 時　会場 1 F 全員集合。打ち合わせ。

・1 F 会場設営（各スペースの張り紙。案内張り紙）
・講演会スペース―マイク、アンプ、プロジェクター、スクリーン、PC、ビデオ設置。
・車いす読者スペース→ホワイトボード設置。
・受付スペース設置→　利用登録書を書く机 2 台。いす。貸し出しカウンター 1 台、いす。
・タイムスケジュール（オセロ表）を映し出すスクリーン、プロジェクター設置。
・2F 会場設営（各スペース、案内の張り紙）
　対話スペース（ロールスクリーン閉じる。 1 ～10 までの対話の机にプレートを置く。）間仕切り。
・書庫・スタッフ控え室（ポット 2 設置。延長コード。お茶・お菓子など置く）
・入口入ったところに（読者の感想を書く）掲示板の設置（模造紙、マジック）

11 時正門にお弁当取りに行く→12 時受付まで各自昼食。

11 時半　会場外案内開始（２）。受付開始準備・シュミレーション。
　　「本」の方を 2 F に案内

12 時　受付開始。1 F 案内（1）利用登録書カウンターで説明（2）。写真顔出し拒否の方にリボンをつけてもらう。貸し出しカウンター（2）受付、PC に予約を打ち込み。予約票を渡す。2F 案内（1)。「本」の方が集合次第、打ち合わせ。

受付の様子

12 時半　第 1 回　対話開始　以降 1F 受付（1)、2F 対話会場(タイムキーパー)(2）,2F 会場案内（1)、書庫 2

対話の様子

講演会の様子

13 時 10 分～14 時　第 1 回　講演開始(会場担当 2)―司会・進行。プロジェクター・スクリーン、ビデオ撮影

13 時半　第 2 回　対話開始

14 時半　第 3 回　対話開始、第 2 回　講演開始(2) ―司会・進行。ビデオ撮影。

15 時半　第 4 回　対話開始。交流会準備 (1F お茶、お菓子。ポット。)

16 時　対話終了、交流会会場(1F)に移動、

16:10-交流会　(下写真)

17 時　後片付け

18 時　解散

東京学芸大学ヒューマンライブラリー来場者数と内訳

参加者総計 47
本　12
スタッフ 15（学生 8、教職員 6、一般（本と兼任）1）
取材（読売新聞） 1

スタッフ以外読者（利用登録書提出）20 人
職業（所属）:
東京学芸大学　学生５（うち留学生１）　教職員１
東京学芸大学以外　学生１（一橋大学)、教員３、会社員４、自営業２、その他２
住所：　東京 14、埼玉２、長野１、青森１、愛知１
何で知ったか：
大学内のポスター・チラシ４、学内ポータルのお知らせ２、知人・友人・先生の紹介８
主催者の web 情報１、主催者以外の web 情報３、その他（学内の説明会）
動機・期待：
HL にかねてから参加したかった、HL の本役をやったことがある、HL を自分たちで開催したいと考えているため２、自分の国で HL に参加したことがあってもう一度参加したかった、明治大学の HL に参加して楽しかったので､坪井先生からの紹介､友人が出るというので､LGBT について知識を深めたいと思ったため、体験を聞きたかったため、異文化理解に興味があるから、勉強のため。

当日の貸し出し状況

机番号	作者名 （ ）空席あり （数字）予約済み	第１回 (12:30-13:00)			第２回 (13:30-14:00)			第３回 (14:30-15:00)			第４回 (15:30-16:00)		
①		22	33	34	51			47	49	48	36	5	
②					講演 13:10			21	36	27	10	31	24
③		35	24	48	35	28	50	29	31		47	4	34
④		36	28		24	49		3			8	38	39
⑤					35	5	4	6			29	27	
⑥					23	36	47	22	33	24	35	6	37
⑦		29			27						26		
⑧		26	27		22	33	34	講演					
⑨		23	25		30	7		26	28	34	3		
⑩		49			26	29	31	35	10				
⑪		47			25			8			1		

＊番号は、利用登録書の通し番号。受付で予約のなかった「本」は、適宜、スタッフが「対話」に入った。

読者から「本」へのメッセージカード

- 「イスラム国」のイメージの強いイスラム教でしたが、実際に○○さんとお会いしたところ、そのイメージは全くなくなりました。以前、イスラム教に改心したという日本人の方が教材となる授業（小学校）を見たことがありましたが、「差別は偏見を生む」というメッセージを知りました。今回のように、最初から「怖い」というイメージを決めつけるのではなく、自分の目で知ることこそ、正しい情報なのだと思いました。ありがとうございました。
- ムスリムの方から、直接お話を聞いたのは初めてでした。断食の目的など知らなかった機会も多かったです。この度はありがとうございました。

- なかなか聞く機会のないお話を聞けて、とても勉強になりました。遠い地域のことと思っていましたが、これからはもう少し関心を持って、自分でもいろいろ調べてみようと思います。ありがとうございました。

- 日本でこれから大きな問題になると思います。“予防”とこういう人々がいるということを少しでも多くの人に知ったもらうことが大切だと感じました。
- 外国につながる日本語母語の子どもたちならではの悩みを知ることができてとても勉強になりました。ありがとうございます。
- 日本語母語の外国につながる子どもたちの現状（課題）は、考えたこともなく、大きな気づきでした。子供たちを見るとき、今までとは違う目線で向き合えるような気がします。ありがとうございました。

- 日本で最も多様性が認められていると思っていた東京でも、偏見を持つ保護者がいることに驚きました。理不尽なストレスをあまり感じずに生きられる世の中に、1 日でも早くなることを願っています。
- すみません。黄色が好きなので黄色にしてしまいました。体育教師こそセクシャルバイアスがあるという話がささりました。まさしくその通りだと思います。どうしたら学校の先生たちの考えを変えることができるのか、考えていかなくてはと思いました。ありがとうございました。

- 貴重なお話ありがとうございました。分かりやすい言葉を作ってくださって、楽しくお話を聞くことができました。
- 僕は今は治療して FtM に近いですが、お話を伺っていて共感するところがとても多かったです。（バリバリの FtM さんと話が合わないことが…）自分らしさって一人一人違うよなぁと改めて思いました。ありがとうございました。

・ オープンに質問に答えていただけて、ちょっと身近になりました。年代的には近かったので、ご両親の判断すごいなぁと思いました。

・ 今日一番のエキサイティングなお話でした！

・ 自閉症協会調べてみます。ありがとうございました。
・ 発達障害の特徴に関するお話について、自分に当てはまることが多く驚きました。人間は誰しも「違い」を抱えているというお話がありましたが、障害という診断名だけが全てではないと知りました。来年以降、小学校の教師として、子ども各々の特性を見極め、個々の得意とするものを伸ばしていけるような教員となりたいです。ありがとうございました。

・ 以前、カフェテリアでお会いしたことがある方でしたが、今回 30 分間お話を聞くことができ、「本」の方々の面白さにさらにひかれました。今回のお話の中で特に印象的なのは、「お父様の死がすべて＋αになっている」ということでした。私自身、来年以降の職について不安を抱いていましたが、ある意味それは私にしかできない経験として、＋αになるのだと知りました。これからも、自分が「やりたい!!」と思うことを大切に生きていきます。ありがとうございました。

・ 自分たちから会いに行く　なるほどと思いました。

・ たいへんな経験をされたと思いますが、今回はお話しいただきありがとうございました。お体を大切にされてくださいね。SNS 等、のぞかせていただきます！

学芸 Human Library・「読者」として参加した感想

この前も「読者」としてヒューマンライブラリーに参加したことがあるが、今回の「本」は前の「種類」と全く違い、出会ったことがなかった「本」だった。新たな生き方を伺うことで、自分の価値観と考え方を見直すことができるほど大変勉強になった。また、日常出会うことがほとんどないさまざまな人たちが一斉に集まるのが、ヒューマンライブラリーのよさでもあると感じた。

LGBT の「本」2 冊、挫折に関する「本」1 冊をお借りした。感想は以下の 3 つに分かれている。

まずは、相互理解を深めることの難しさ、大切さを改めて感じた。違う(different)=違う(wrong)ではない。不完全な家族で育った子は性格が「不完全」に限らない。自分と同じ性別の人が好きであっても、決しておかしくはない。マイノリティであることは悪くない。人間みんな同じでなくてよい、ということを大切にすることが重要だと思うようになった。しかし、男性仮性半陰陽の方は色々な治療を受けたあげく、不妊症を直さないまま婚約解消されてしまった話など、社会的マイノリティを抱える人の生活環境はまたまた厳しいということもわかった。彼らが認められる世の中を作るように、何か改善法を挙げるのは課題になっていると考える。

そして、頑張る彼らの姿に勇気をもらえた。子供は性分化疾患者であっても、男の子用と女の子用のおもちゃや洋服を両方準備し、性別を子供自分で選ばせ、積極的に子供を育っていく。性分化疾患者である自分を認め、健康や社交的な問題を超えて男でも女でもある境界線の谷間で生きていく。小六の時お父さんを失ったが、十何年間人を助けるためボランティアをし続ける。辛い経験をしてきたり、大変なことがあったにしても、それぞれが与えられた境遇の中で自分らしく生きようとしている。「当たり前の自由」さえないがとても人間らしく生きていく彼らの姿を見て、何不自由もなく自由に慣れるあまり怠惰に日々を過ごしている私は、なんと不器用だろうとか、私たち「自由人」はマイノリティを差別し、さげすみさえする筋合いはあるのだろうかなど、そんなことを考えさせられた。人は何かしら背負いながら生きていくということこそ、人生の素晴らしさではないか。それで、少しだけ挫折にあったら、やる気がなくなったり、絶望したりするなんて、これからはやめておく。

最後に、今回、ヒューマンライブラリーでさまざまな人の話を聞き、ヒューマンライブラリーのようなさまざまな公共活動の意味を改めて考えさせられた。正直恥ずかしいことだが、前の今回も、実は先生が勧められるがままにヒューマンライブラリーに参加することになったのだ。でも、今は私一人でできることは限られているが、ヒューマンライブラリーのようなさまざまな活動の橋渡しみたいなこともできたらよかったと考えるようになった。様々な活動を広げ、一人一人で少しずつより多くの人の考えを変える。こうすれば、世の中の多くの問題が解決しそうだと思っている。

人間は一番素晴らしい本だと思う。

ヒューマンライブラリーに参加して思ったこと

ヒューマンライブラリーという名称は授業で岡先生から紹介されるまで知りませんでした。調べてみたところ、日本では近年広がりを見せているようですが、まだ認知度は低いようです。概要を聞いた時には、語り手を「本」、参加者を「読者」としているところが面白いと思いました。東京学芸大学で行われたヒューマンライブラリーが私にとって初めての参加となりましたが、この活動はもっと活発化し全国的に広がり、より多くの人が「本」との対話を通して多様な生き方への理解を深める場をつくるべきだと感じました。

「本」との対話はその方の人生の喜びや苦難、どのように乗り越えてきたかなどを知るだけではなく、自身の生き方や考え方をとらえ直すきっかけにもなり得ると思います。〇〇さんは、性分化疾患についてわかりやすく、そして楽しいエピソードを交えて話してくださいました。話していて驚いたことは、幼いころからご自身の疾患をアイデンティティとしてとらえていたという事です。そこに至った背景には、ご両親の子育ての方針が大きかったという事です。私は右腕に軽度の機能障害がありますが、未だに個性やアイデンティティとしてとらえる事が難しいです。本田緑葉さんは対話の中で、「どう悩むかではなくどう楽しむかが重要」とおっしゃっていました。この考え方を自分も持てるようになりたいと思いました。トランスジェンダーの〇〇さんとの対話を通して、自分が抱える問題を別の視点から考えてみようと思えるようになりました。

つまり、「本」との対話は、他者のアイデンティティや考え方を知るだけでなく、自己のアイデンティティ等を捉え直すことにもつながるのではないかと思ったのです。

ヒューマンライブラリーが始まったきっかけを調べたところ「障害者や社会的マイノリティを抱える人に対する偏見を減らし、相互理解を深めることを目的とした試み」とありました。

しかし、私としては、生き方や自分自身のアイデンティティについて悩みを持ちやすい中高生にも積極的にヒューマンライブラリーに足を運んでもらいたいと思います。「本」の内容が多様であるように、「読者」の目的も多様なものとなり、ヒューマンライブラリーが特別なイベントではなく身近な、それこそ実際の図書館のような存在として広がってほしいと参加して思いました。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016　会計報告

収入 合計　　59,000 円
協賛金（団体 2）＼40,000
　　（個人 6）¥16,000
当日カンパ（1）　¥3,000

支出 合計 59000 円
チラシ印刷代（1000 枚）　¥4038
チラシ・バナーデザイン料　¥7500
スタッフ腕章（15）　¥1620
資料印刷用紙（A4 厚口、A4 上質紙）¥776
本交通費（¥2000×12）　¥24,000
スタッフ弁当代（15）　　¥15,000
お茶・お菓子代、雑費　¥6066

残り　0 円

下記は岡研究費で支出
A1 ポスター印刷代（5 枚）¥2310
バナー（防炎クロス 2 枚）印刷代　¥6190
本報告書作成（本文 56 ﾍﾟｰｼﾞ、100 部）約 4 万円

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016 読者・「本」アンケート調査
グラフ・自由記述
（開催:2016 年 12 月 04 日）

ヒューマンライブラリー共同調査(坪井・横田・工藤 + 岡)

読者 18 人、本 7 人の回答

1.グラフ

※グラフの割合は有効回答のみで算出し、小数点第二位を四捨五入。無効を含めた%は 2.単純集計表に掲載

読者アンケート

図 Q1.年齢 n=18

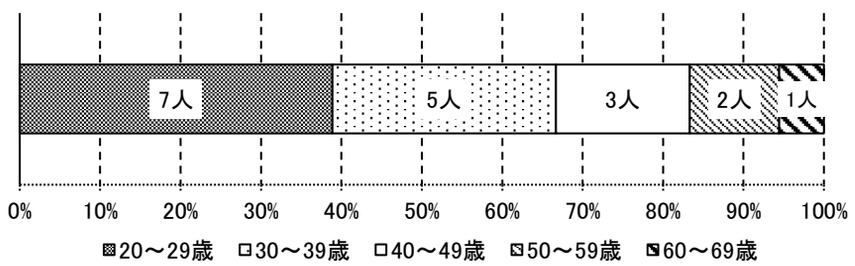


図 Q2.性別(性自認で) n=16

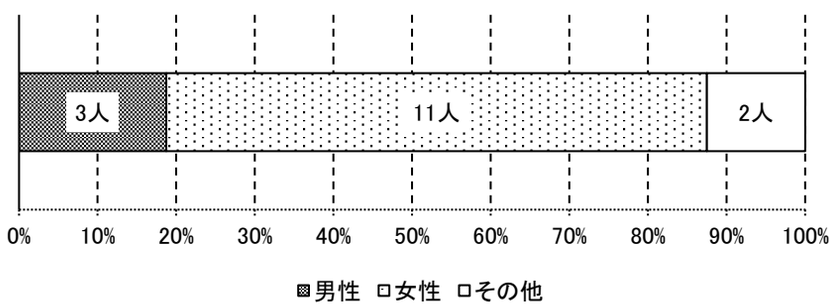


図 Q3.職業等 n=17 ※「その他」では1名が「教員」を回答

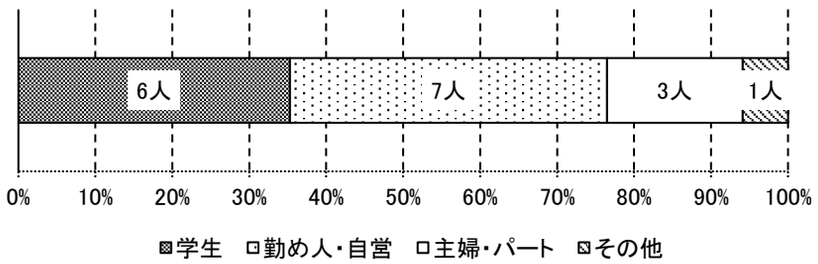


図 Q4.HLの参加経験 n=18

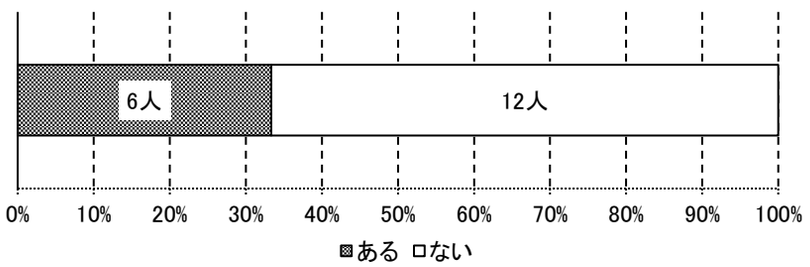


図 Q4SQ1-1.最初に参加した時期 n=6

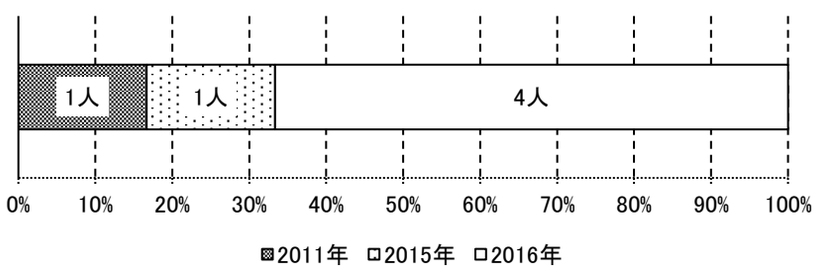


図 Q4SQ1-2.最初に参加した開催地・主催者 n=6

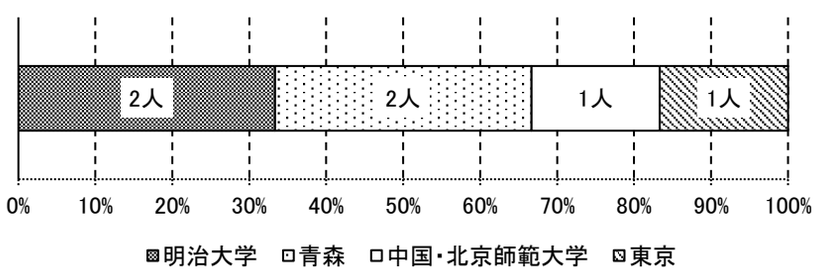


図 Q4SQ1-3.今回を含めて何回参加したか n=6

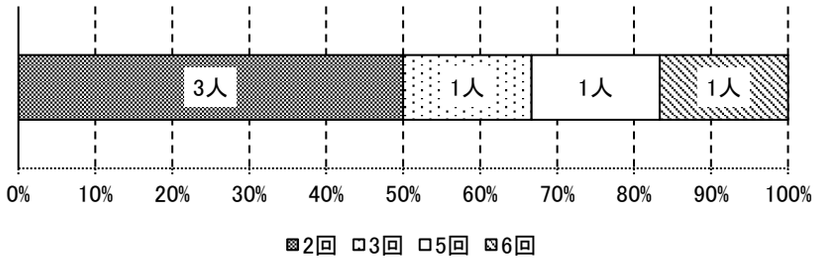


図 Q5.このHLを知ったきっかけ n=14

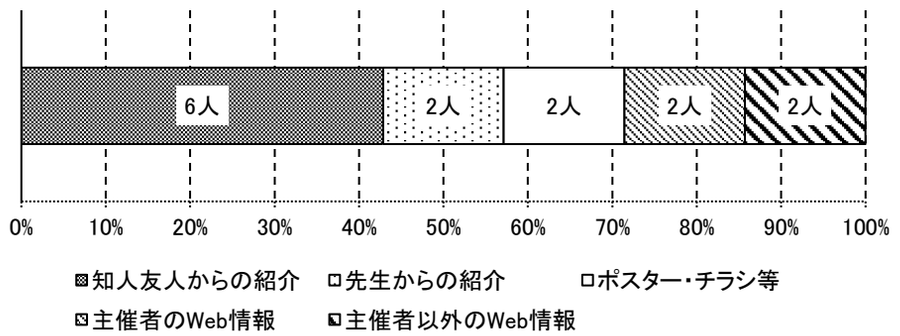


図 Q6-1.HLについてのイメージ [A.面白い-退屈な]

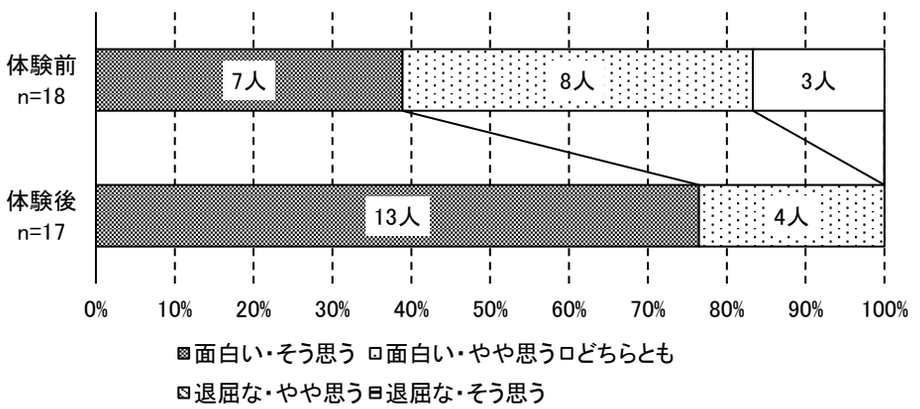


図 Q6-2.HLについてのイメージ [B.身近な-別世界の]

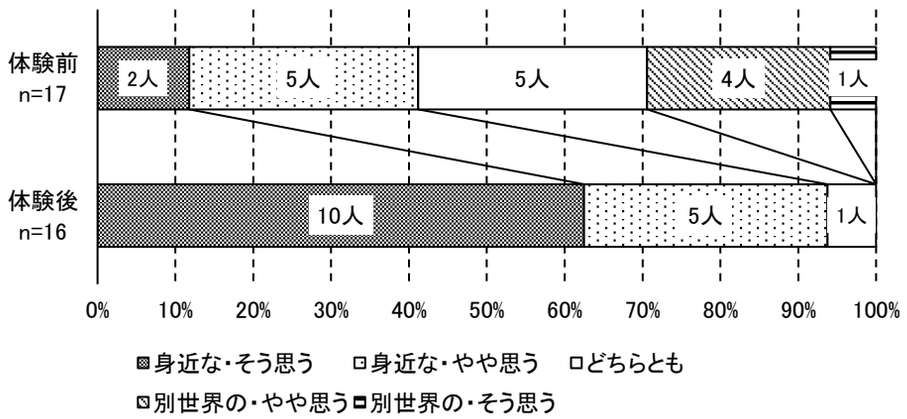


図 Q6-3.HLについてのイメージ [C.難しい-易しい]

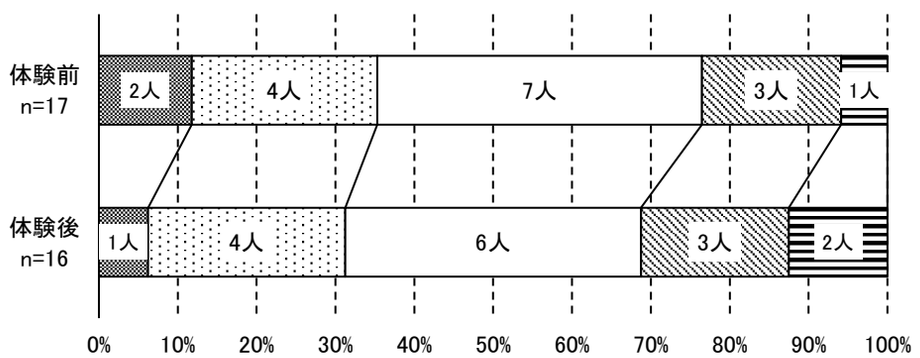


図 Q6-4.HLについてのイメージ [D.誠実な-不誠実な]

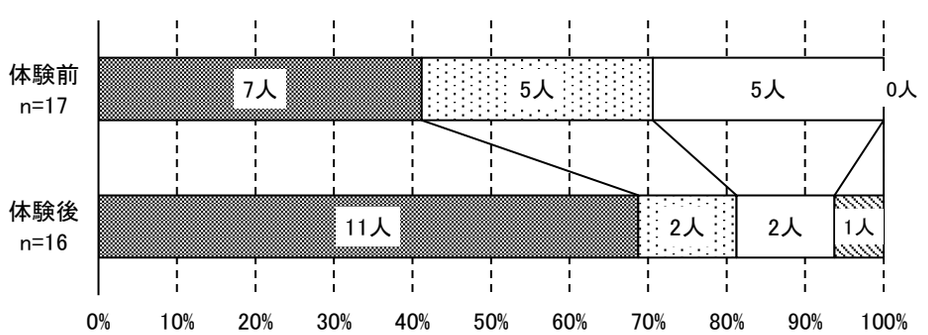
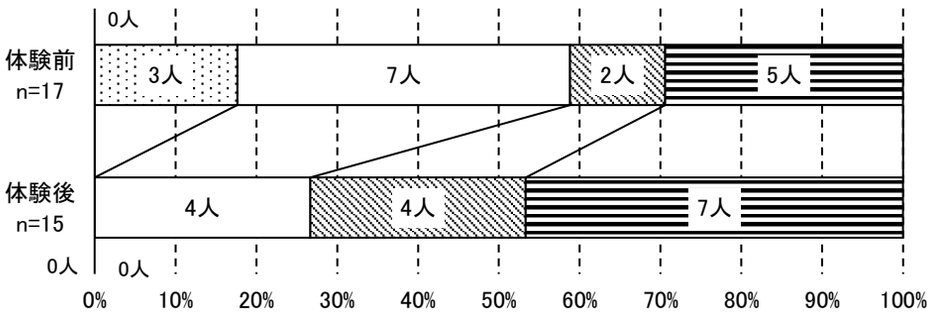
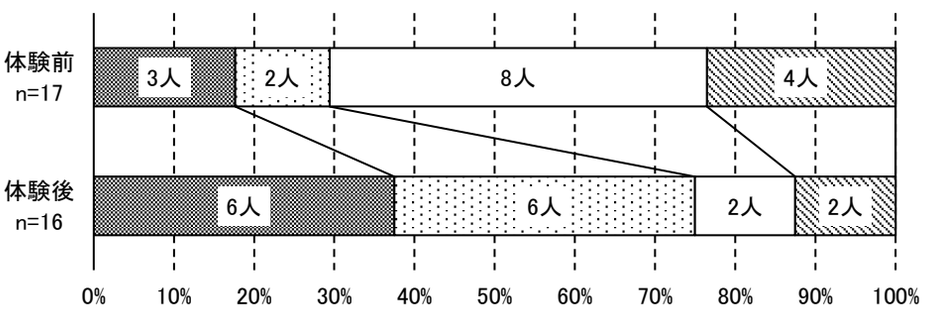


図 Q6-5.HLについてのイメージ [E.こわい-優しい]



こわい・そう思う こわい・やや思う どちらとも 優しい・やや思う 優しい・そう思う

図 Q6-6.HLについてのイメージ [F.明るい-暗い]



明るい・そう思う 明るい・やや思う どちらとも 暗い・やや思う 暗い・そう思う

図 Q7.最も印象に残った「本」とタイトル n=17

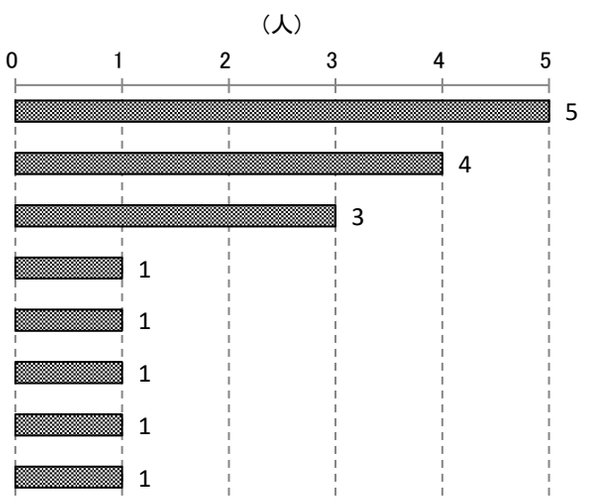


図 Q7SQ1.1.最も印象に残った「本」に対するイメージの変化①

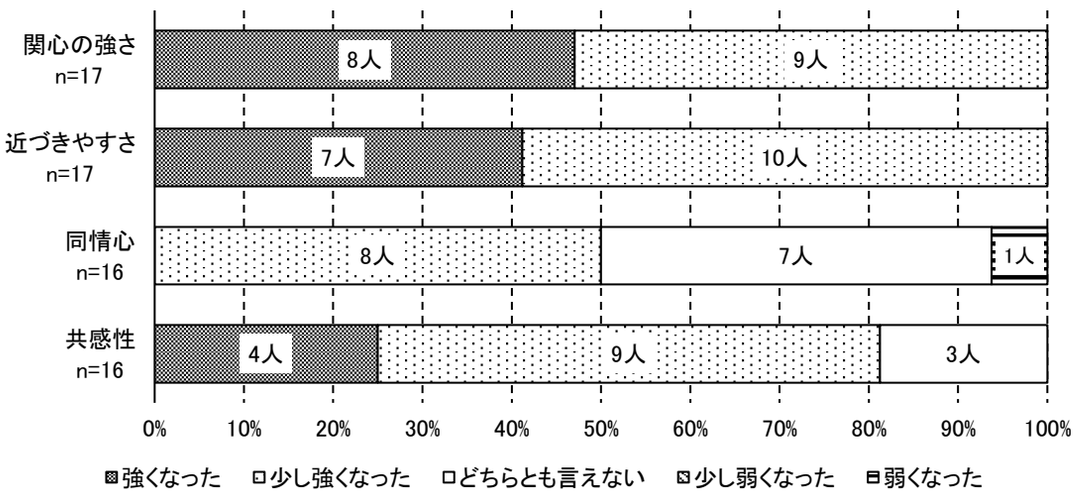


図 Q7SQ1.2.最も印象に残った「本」に対するイメージの変化②

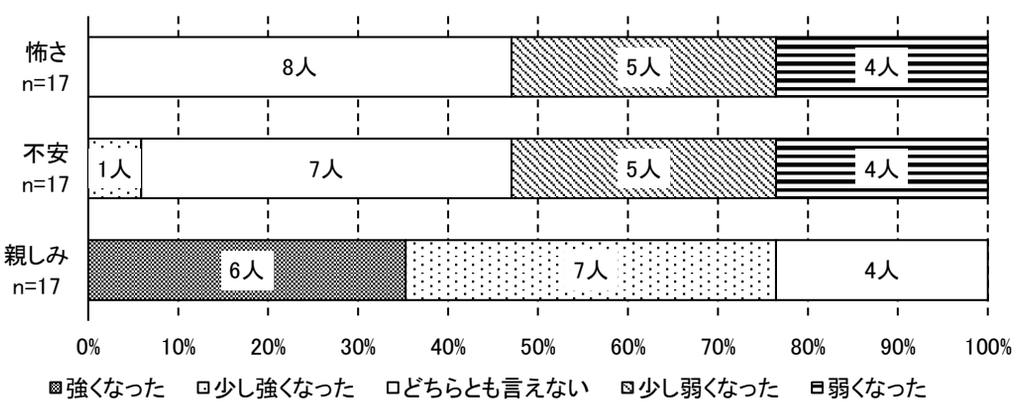


図 Q8.1.「本」との対話を体験して何を得たか①

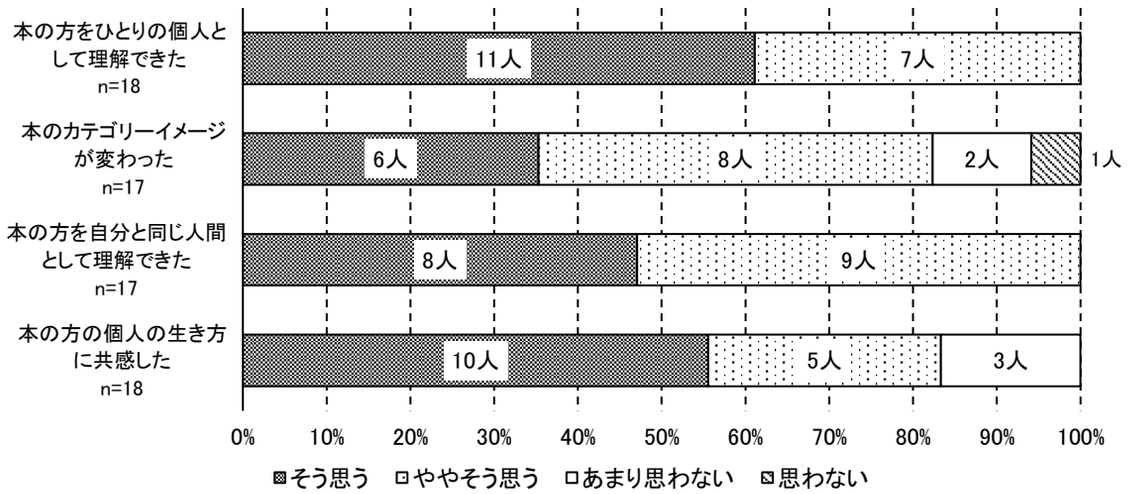


図 Q8.2.「本」との対話を体験して何を得たか②

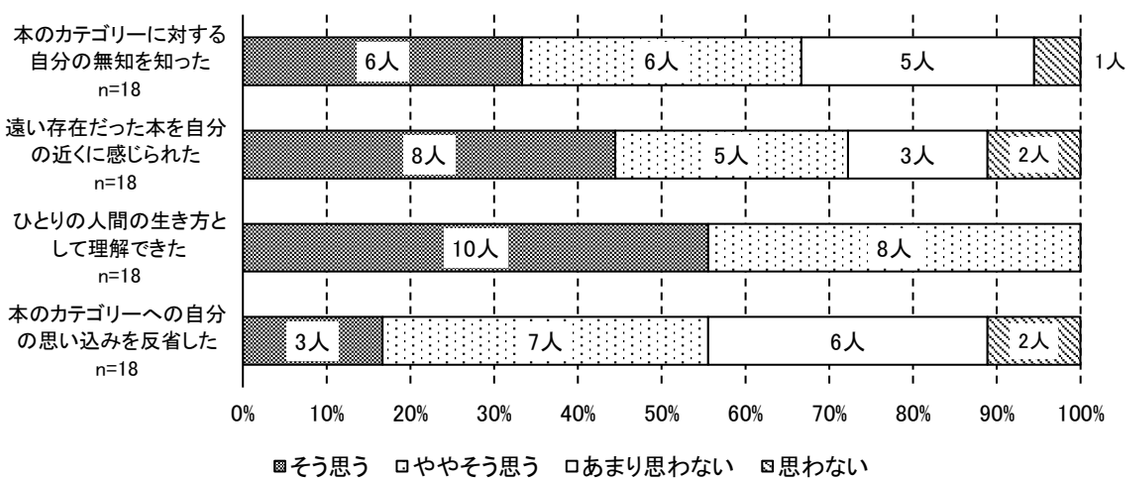


図 Q8.3.「本」との対話を体験して何を得たか③

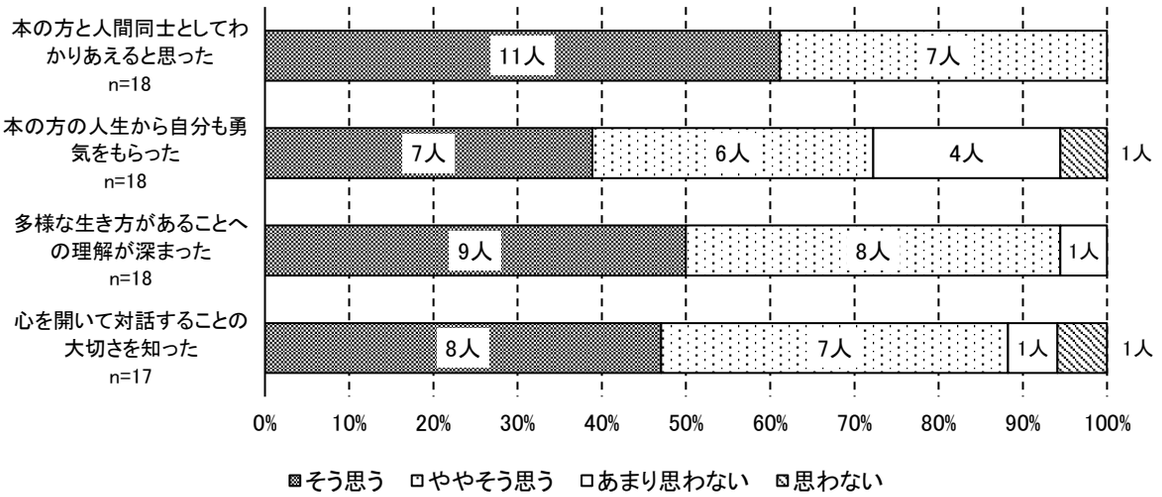


図 Q8.「本」との対話を体験して何を得たか
個人化理解・再カテゴリー化理解・上位カテゴリー化理解（平均点）

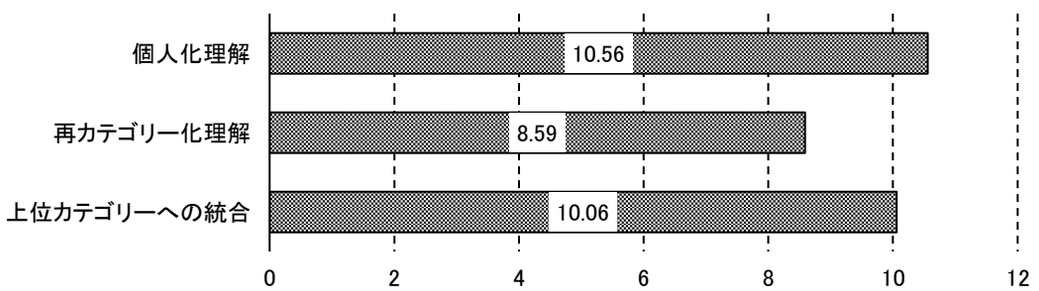


図 Q9.今回体験したHLはどうだったか n=18

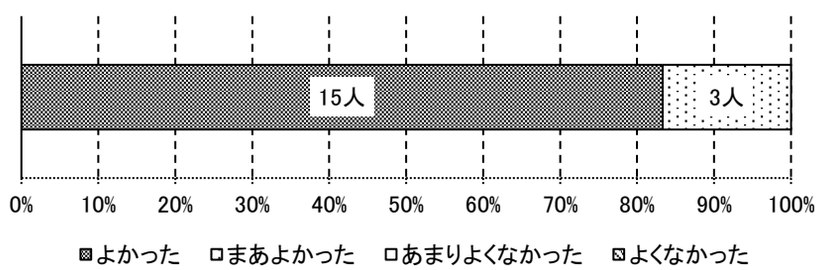


図 Q10.スタッフの対応はどうだったか n=18

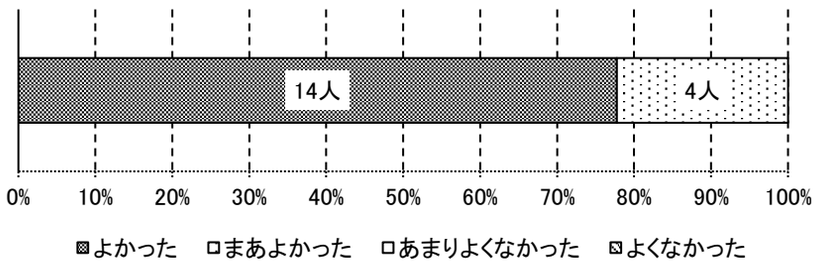
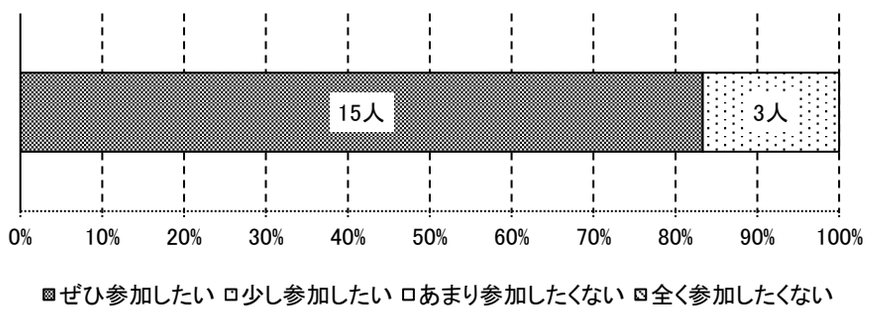


図 Q11.またHLに参加してみたいと思うか n=18



「本」アンケート

図 質問1.HLに「本」として参加した回数 n=7

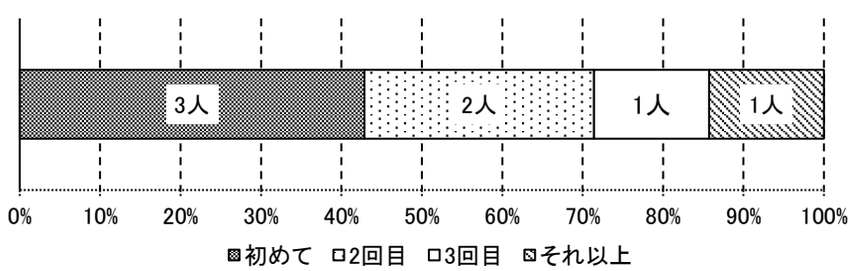


図 質問2.対話時間30分の長さについて n=7

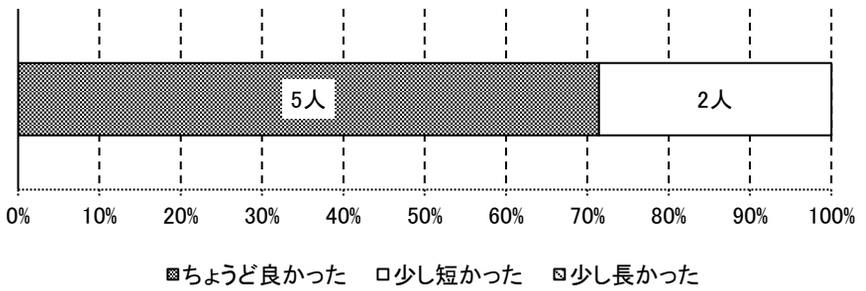


図 質問3.読者から応えたくない質問を受けたか n=7

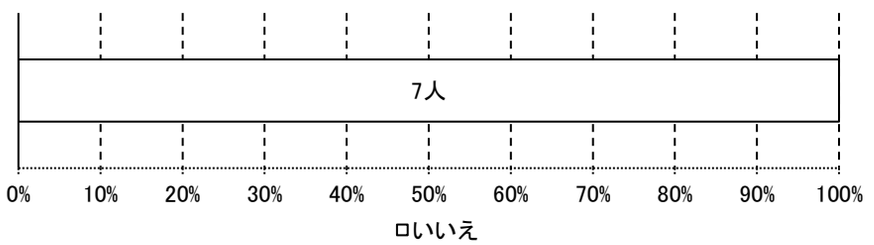


図 質問5.「本」をしての感想(A-E) n=7

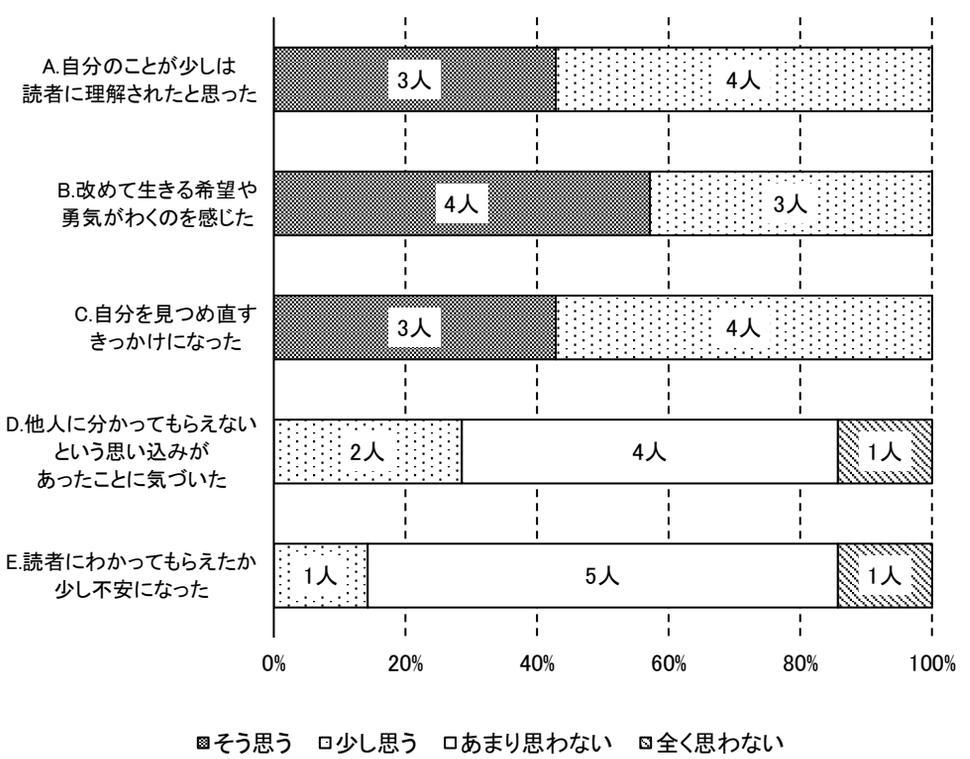
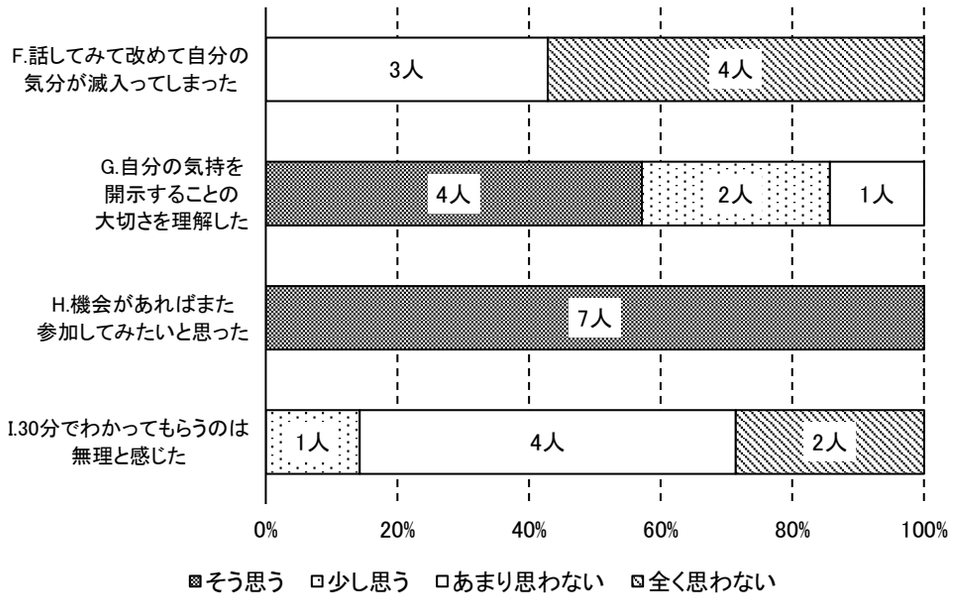


図 質問5.「本」をしての感想(F-I) n=7



2.自由記述

読者アンケート

Q7SQ2.最も印象に残った「本」との対話から感じた気付きや感想

〈(居場所を探して～外国につながる子どもたちとの 6 年間～)〉

→ 今まで、まったく考えたこともなかった世界だったので、正直驚きました。そして、外国につながる子供たちについて、もっと理解してあげる必要があると思いました。最近出会ったダブルの子供の言動について、私なりに少し理解が出来た様な気がして、今回お話が聞けてよかったです。とても有意義な体験が出来ました。ありがとうございます。

→ 外国人が増えてきた→文化を理解して受け入れよう！というような動きは年々増えてきていると思いますが、問題はもっと当たり前のところにあるという気付きを得ました。

→ 全く気付かなかったところに、ひとりで悩んでいる子ども達がいたんだなあと思った。

→ 日本社会で直面している問題でもあるので、今後の対応、政策、課題としていろいろ考えさせられました。

〈(男でも女でもある境界線で谷間な生き様)〉

→ 重い話になると思ったが、意外と楽で話しました。「本」の方がいろいろ日常生活のエピソードを教えていただいて、本当に勉強になりました。

→　自由に話す形式だったので、とてもリラックスしてお話ができた。
→　共感。似た経験を持っているため。
→　性を選ばなければならない場面が起こりうるという想像もしていなかったことを考えさせられました。

〈(性と生～「ありのまま」を考えよう～)〉

→　生きづらさや違和感は私自身にもあるけれど、普段は見ないように、ないものとして生活している。世の中にはその生きづらさや違和感にこんなにも誠実に向かい合っている人がいるということに、なぜか安堵した。
→　当事者の目線からこそ出る言葉や、勉強のしどころを知れました。
→　具体的な困難さを伺い、それは他のマイノリティーにも共通するものだと感じました。とまどいなくカミングアウトできない社会状況が、さらにそれぞれを生きにくい社会にしているというジレンマを感じました。

〈(クルド人問題と在日クルド人難民)〉

→　日本のような島国とヨーロッパの大陸民族との考え方の大きな違い。

〈(イスラム教のルールと必要となる設備)〉

→　イスラム教の方とお話する機会というのが今までなくて、もっと厳格なイメージがありました。アッティさんは明るく優しくお話して下さって、イスラム教を身近に感じることが出来るようになりました。

〈(挫折を挫折と感じない海外好きな私)〉

→　以前、お会いしたことがある方だったが、今回の対話を通して、さらなる深い学びを得ることができた。挫折だと思っていたことも、それをポジティブに捉え、自分形成のための一助となったと捉えることが大事だと分かった。また、「自分がやりたい」と思ったことはそのときにやることが得策だと知った。

〈(「A っ De も、Ho んの少し、De きたかも。」)〉

→　特例子会社のリアル、もっと聞きたいと思いました。

＜「ああ～」「わかりません」「治りません」＞

→　病気のたいへんさに息をのむ思いだった一方、不思議な明るい力強さも感じました。1：1でお話しすることにより、じっくり聴くことができ、より理解が深まったようです。

Q10SQ1.今回の HL の内容や運営についてよかった点、改善点

→　・少人数で話せたことが良かった。30 分の空きがあって時間の合間に余裕があった・今日は人数が少なかったけど、多くなると「本」の予約が早い者勝ちは混乱するかも。

→ 対話するのに人数(最大 3 名)はちょうど良かったです。タイムキーパーはもっとしっかりすべきかと思いました。

→ 丁寧に対応してくれたり、本の方と対話ができてよかった。本の人の話が長すぎることが多かったのが大変でした。もっと大々的に宣伝してもらえたらうれしいです。

→ 今回ヒューマンライブラリーを体験させていただき、今まで自分とは別世界だと思っていた方々と身近に接することが出来、いろいろ気づくことが出来ました。これからの活動も楽しみにしております。

→ 以前 Human Library に参加した時、各「本」は自分の「表紙」を作ったのでした。分かりやすくて、印象に残りました。今回も「表紙」を作って読者に配布すればいいなと思います。

→ 交流会あるのがいいですね。

→ 準備、運営お疲れ様でした。普段関わる機会のない方とお話できて、自分の思い込みが浄化されてゆくような気がするので、ヒューマンライブラリーは好きです。ありがとうございました。

→ 2 部制(入れ変わり)制で、来場者を増やせればよかったです。授業の一環としてもいいかもしれません。広報など。

→ 運営システムがよくわからず、3 時過ぎに来たらば、1 名のお話しか聞けず残念でした。

→ 講演会が同時開催されていると、そちらにも行きたいが、どうしても途中抜けになってしまう。講演会だけの時間も良いと思った。また、スケジュールをその場で考えるのは難しい。事前の予約ありなどにして、余裕をもってスケジュールを組みたい。

→ “多様性”という場合の多様は、カテゴリーではなく“個人”だと思うので、「わかりやすさ」「伝わりやすさ」としてのカテゴリー（ex. 障がい、LGBT など）はいらないように思いました。最後まで。そのカテゴリーを抜けきらないと、個として対話することはできるのか（できないのでは）ということもやっぱり最後まで考えました、場があるということには大きな意味を感じています。

「本」アンケート

質問 4.「本」を体験した感想

→ 改めて人生の振り返りをできました。共感してもらうことで人ってより自信が持てますね！！貴重な機会となりました。ありがとうございました。

→ 対話の楽しさを感じました。その人とその場の雰囲気を感じて話すことは、よりその人に合った話題に変えていけたりしてよかったと思う。一方で、できれば 1 対 1 の方がよりこのヒューマンライブラリーを感じられるのではと思った。本も一気に読むより、立ち止まり、考え読むと思うので、その間が大切にできたらと思う。

→ 読者の方からたくさんのエネルギーをいただきました。読者の方の参考になれたなら幸いです。どの本も魅力的なあらすじだったので、自分が読者になりたいくらいでした。次回は読者としても参加してみたいです。スタッフのみなさんありがとうございました。

→ 皆さん、本当に優しい方で、私自身もとても良い時間を過ごせました。ありがとうございました。

→ 「本」である私があまりにもヨレヨレだったので(配置やマスクのことなど)ご配慮いただけたことで、ま

ずは安心してこの場に臨むことができました。ありがとうございました。「読者」の方々にも、大変丁寧に扱っていただき、また、私の話から様々なご質問もいただけたのですが、それがとても想像力が豊かなもので、私自身がたくさんの発見をいただきました。

→ 他数の考えや理解があるなと感じました。

→ 今回本として出身校で発表できたことがとても嬉しかった。特に教員志望の若い方と話すことが出来たことで、これからの教育に希望を持つことができた。

質問 6.HL の対話の形式や運営に関する改善点など

→ ご質問をいただく場合に、複数の読み手がおられると、遠慮されてしまうのが勿体ないと感じました。ご招待頂き、私も楽しかったです。次回は読み手としても参加してみたいです。

→ 上記のように 1 対 1 でやれるといいなあと思います。

→ 読者の方が周囲の音を気にされる様子がありました。ブースとブースの間の距離がもう少し広いとよいのかなと思いました。

→ 全ての本の人が充分に発表(今回はできたと思いますが)できれば、良いように思う。読者がもしいなかったら、本の人もさみしく思うのではないかと思う。

→ ・お菓子がもう少し欲しかったです！・会場の椅子が固くてお尻が痛かったです(笑)

振り返り会で出たスタッフの意見

12 月 12 日（月）5 限　反省会　＆　個別インタビュー

1．日程について

・　日程が、日本語能力試験とぶつかった。他のイベントもいくつかあり、次の週でもよかったかと思われる。少なくとも試験とは重ねないように。
・　1 つの案として、学園祭の時に開催することも考えられる。ただし、秋学期開始後すぐなので、春学期から準備しておく必要がある。
・　いずれにせよ、実行委員会の立ち上げは、春学期の早いうちからしておく必要があるだろう。

2．場所について

・　第 2 むさしのホール 2 階は、エレベーターが止まらないのを後で気づいた。今回はたまたま車いす利用の方がいなかったが、バリアフリーの面での配慮は最初にするべきだ。
・　設備の配置などの点においても、今後は講義棟でできたらと思う。→N 棟３F
・　会場に WIFI がなかったので不便。
・　セクシュアリマイノリティへの配慮として、男女区別なく使えるトイレの確保と表示が必要だろう。（誰でもトイレなど）

3．「本」の設定について

・　在日外国人、セクシュアルマイノリティ、障がいのある方、ユニークなキャリアを持った方の４つのカテゴリーで、バランスよく設定できたと思う。
・　来年度以降、学生が自主的に選定して交渉していくのがいいと思う。

4．当日時間配分について

・　当日、30 分対話、30 分休憩で 4 回の対話というのは適当な回数だと思う。講演に今回あまり人が来なかったのは残念だった。50 分設定はよかったのか検討。
・　10 分前の合図､時間の合図を音楽などではっきりわかるようにし､守ってもらう方がよい。（当日は結構ルーズだった。）
・　対話の前に、「本」の方を早めに集めて、自己紹介などし、交流の場を持ってもよかったと思う。（12 時半開始であれば、11 時くらいから行う。）
・　30 分読書、30 分休憩がちょうどよかったと思う。最初のスケジュール登録の際に、時間がかかるのでスタッフを増やすべき。

5．広報・宣伝について

・　学内、学外ともある程度、広報はできたかと思うが、学内者の数が少ないのが残念である。今後は、関係の教員などの協力も得て、早くから宣伝していくべきかと思う。
・　学内のサークル関係にも呼びかけてもいいと思う。
・　SNS も早いうちに宣伝を始める。

6．スタッフの役割分担
・　宣伝のスタッフに結構負担がかかったかと思う。もう少し準備期間があればいいかと思う。
・　最初の受け付けが大変だった。前日までに受付のシュミレーションをしておくべきだ。
・　お弁当が豪華すぎた。→500 円程度で、簡単に食べられるものでよい。「本」の打ち合わせを早くするのであれば、「本」の分も購入する。
・　今後、早めに実行委員会を立ち上げ、学生主体のものとして準備していくのが良い。
・　スタッフ「本」の模擬体験会や事前学習会があればいいと思う。

7．その他運営に関する問題点
・　メーリングリストを工夫すべき。

8．今後の課題
・　報告書の作成。スタッフの振り返りレポートを提出。

実行委員会スタッフの感想レポート

学生の感想

ヒューマンライブラリー　レポート

はじめに、ヒューマンライブラリーにスタッフとしてかかわる機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。

ヒューマンライブラリーというものを知ったのは今回が初めてだった。以前より、様々な方のお話を聞き自分の世界を広げられるような活動は好んでおり、積極的に行っていいたため、すぐに参加を決めた。一方的な講演会でも、意見を求められるディスカッションでもない、対話というかたちはとても心地の良いものであった。

読者としては〇〇さんのお話をお聞きした。〇〇さんは NPO 法人カタリバの職員として子供や若者の生き抜く力引き出し、応援しているという。カタリバでは、ナナメの関係、つまり、親や先生、友達とも違う「憧れの先輩」という関係を大切にしているそうだ。この話は、私が神奈川県藤沢市の方で行っている「My Ow Place～成長に愛を～」の方針と重なる部分が多く、共感と安心感を覚えた。若者だからできること、それを包み込むように、大人だからできることがあるのだということを、〇〇さんの家族への愛情と共に知ることができた。

また、当日からではあったが、〇〇さんの担当をさせていただいた。〇〇さんは発達障害を抱えており、個人的にとても興味のある分野であったため、担当としてお話ができたり、スピーカーとしてではない控室での一面が見ることができたりと、貴重な経験ができたことに感謝している。発達障害でありながら発達障害を抱える若者を支援しているというのは一見すると特殊なことであるが、〇〇さんがおっしゃる「発達障害がアイデンティティなのではなく、いろいろある個性の中の一つに発達障害という名前がついているだけ」ということをもとに考えてみれば、何らおかしいことではない。関心を持ち考えてきたつもりではあったが、やはり、障害者、健常者と分けて考える意識がいまだ残っていることに気づかされた。発達障害というのは、簡単に言ってしまえば極端にあることだけを苦手とする障害だ。しかしこれは、得意不得意の延長線上にあり、障害というよりは、個性といったほうが適切なのだ。ただ、その個性が日常生活において困難が出てくるほど大きいため、発達障害という診断名をつけているに過ぎない。だからこそ、彼らの前にある障害を取り除くことは賢明な判断とは言えない。我々がすべきなのは、石をよけることではなく、その石にどうやったら向き合うこと、あわよくば乗り越えることができるのかを考えること。それこそが本当の意味での自立に向けた支援なのだ。そしてなにより必要なのは

周りからのサポートよりも当事者の意志である。「失敗しても大丈夫だからちょっと頑張ってみよう」そんなふうに思える環境が、いま、我々が作っていかなければいけない共生の社会というものなのではないだろうか。

ヒューマンライブラリー@東京学芸大学２０１６ 感想・反省

感想： 今回は、ヒューマンライブラリーの第一回という貴重な会に参加させていただき、ありがとうございました。今回のヒューマンライブラリーに参加したことで、本の方々のような個性や特徴をもつ方々に普段お会いしない、または私たちが気づいていないだけでごく身近な地域の中で一緒に暮らしているということを実感するきっかけとなりました。またそうした個性や特徴を持っていても、それを公の場でお話ししてくださる方は本当に勇気を出して、重い口を開いてくださったのだと、今回の経験が本当に貴重なものでありがたい会だったことを噛みしめました。すべての本の方々のお話をお聞きしたかったのですが、今回は「〇〇さん」と「〇〇さん」のお話を伺いました。お二人に共通していたことは、とにかく明るく語られていたことです。これはお二人だけでなくどの本の方々にも言えることで、特に「〇〇さん」は性に関して学生時代までずっと誰にも言えない、私たちには理解しきれない苦しい思いをされたにもかかわらず、赤裸々に語ってくださった姿からとても勇気をもらい、感動しました。過去を忘れたりなかったことにせず、むしろ経験を土台にして生き生きとしていらっしゃる生き方は、これから自 分が壁にぶつかったときにめげずに頑張る理由となるものだと思います。 今回はお二人におはなしを伺いましたが、ヒューマンライブラリーが来年以降も恒例となるよ うなイベントとなり、また様々な貴重なお話を伺えることを願っております。

反省： 今回は、第一回目ということもあって自分が何をするべきなのか、本の方々に対してどのような立ち回りをすべきだったのかが分からず、会が終わるまでずっと手探りの状態でした。準備にもあまり協力できず、申し訳ありませんでした。学生が、というよりは先生方に準備していただいた会に学生も参加させていただいたといった受動的な姿勢になってしまったことが悔やまれます。もし来年以降も開催されるのであれば、ぜひ今回のリベンジとして準備の段階から主体的に考えながら、積極的に会に参加できるように望みたいと思います。

会の内容についてですが、一人の本の方に２～３人の読者というシステムはちょうどよかったと思います。複数の読者から様々な側面で質問があってほかの読者も、また本の方々も刺激を受けられたように思います。ただ、今回は初めてだったので読者の人数が予想よりも少ない印象でした。特に来ていただいたのは社会人の方々が多く、学生が少なかった

のが少し残念に思います。これから社会に出て、様々な個性や特徴を持った方々に出逢っていく自分を含む学生に、もっとこのようなイベントに参加してほしいと思っております。来年以降は、学生に向けた広報活動に力を入れたら、もっとにぎやかでフレキシブルな会になると思います。

以上です。来年以降もぜひ参加させていただき、どんどん充実した会になるよう尽力していき たいとおもいます。　ありがとうございました。

２０１６．１２．１６

ヒューマンライブラリーを終えて

ヒューマンライブラリーでは、30 分間の対話の中で本の体験や価値観を直接聞くことができます。本と参加者の間に入るものは何もありません。参加者は聴衆ではなく読者なのです。気になった事は何度も質問する、説明してもらう。まるで、本を読み返すかのようです。

岡先生から紹介があるまで、私はヒューマンライブラリーというイベントの存在や、世界中で開催されているという事を知りませんでした。東京学芸大学で開催した今回のヒューマンライブラリーのアンケートや、友人たちの反応からも日本でのヒューマンライブラリーの知名度の低さがうかがえます。大学での実施だったにも関わらず、大学生・大学院生の参加者が少なかった一因はそこにもあると思います。次回開催時にはこの反省をいかし、広報活動にも力をいれてより多くの方にヒューマンライブラリーに足を運んでもらえるようにしたいと思います。

SNS で簡単につながることが出来る時代に、このように人と人とが介して語り合うことは、どこか新鮮ささえあります。画面越しや文面ではなく、当事者と顔を合わせて話し合うことで、本の体験や価値観をより実感する事ができるのではないでしょうか。今回のヒューマンライブラリーに本として参加してくださった方の多くは、社会的に見ればマイノリティといわれている方々でした。マイノリティとされる方々への差別や偏見が存在しているということは、知識としては知っています。しかし、その実情は知っているでしょうか。どこか自分から遠い問題となってはいないでしょうか。ヒューマンライブラリーはそういった意識を変える一助になると思います。

ヒューマンライブラリーの発案者である Ronni Abergel 氏は「本を表紙だけで判断してはいけない」というメッセージを発信し続けています。私は今回のヒューマンライブラリーを通して、「判断できない」のではないかとさえ思いました。話してみなければわからないことは、山ほどあります。知らないままだと軋轢を生むかもしれません。知らず知らずのうちに誰かを傷つけているかもしれません。多様性が重視される現代において、ヒューマンライブラリーの重要性は増していると感じます。

東京学芸大学でのヒューマンライブラリーも今回だけのものではなく、恒例といえるほどに長く続けていければと思います。

ヒューマンライブラリー　ふりかえりレポート

◆スタッフとして参加してみて

今回初めてヒューマンライブラリー（以下 HL と記させていただきます）に関わる機会をいただき、ポスター、チラシの広報作成担当として、また当日の運営スタッフとして参加させていただきました。ポスター作成に至っては今回学芸大学で HL を開催する意義が何なのかを考えながら、またサブタイトルでもある「未来の子どもに伝えたいこと」を念頭におきながら作成しました。ポスターは良くも悪くもそれを見た人の第一印象を左右しやすく、それがどんなイベントでどんな魅力があるのかを引き出せる構成するのに時間を要しました。最終的に出来上がったものがそのコンセプトに沿ったものなのかどうかはまだ自信がありませんが、周りの人たちに印象にのこったなどとコメントいただけて嬉しかったです。そしてスタッフ間でのミーティングを重ね広告のみならず当日までにどんなことをしていく必要があるかを確認し、共有していきました。もともとポスター作成の依頼をきっかけに偶然知った HL でしたが、こうして実際に運営するための過程も参加させていただくことで HL のイベントの全体像もつかめたし、HL の開催意義も理解してきました。

◆成果と課題、改善点

今回「本」の方たちが単なるマイノリティとしての素材ではなく、各々のバックグラウンドも含めて読者と対話しつつお話してくださったのでバラエティに富んだ本が取り揃えられたように思います。本としてピックアップされるのはどうしてもマイノリティだとか、アウトサイダーといった点での語りが多くなるのかなと予想していましたが、空き時間で実際に参加してみると一個人として話す感覚で、障害ってなんだろうと改めて自分に問いかけ思い返した時間となりました。おそらく他の読者も本との出会いで何かが変わったのではないでしょうか。対話環境ではひとつの本に対して３人までという設定で参加者を組みましたが、本にじっくり耳を傾けつつ、読者同士でコミュニケーションをとる中で違った視点からのコメントが得られたりしてとても効果的な人数だったように思います。ただ読者によっては１対１でじっくり対話したい方もいたようで、また複数の本が同じ空間に配置されていたので隣の本の声や音がきになってしまったりということも出ました。

今後の改善点としてはそうした貴重な本との出会いと関わりをもっと多くの人、とりわけ学芸大学に通う学生に体験してほしかったという集客の点と、依頼人としての「本」ではなく HL イベントの企画段階から運営スタッフと協働で作り上げていくことが今後回数を重ねる中でできたらより良いものになるではないかという点があります。集客については今回の企画段階で HL についての知見の度合いがスタッフ間で差があり、全員で共有しきれなかった部分が

ありました。友人にも誘ってみましたが、自身が HL の内容やコンセプトを把握し切れず、実際どんなイベントになるのか具体的なイメージが湧かなかったので積極的に声をかけることがあまりできなかったのが私個人的に悔やまれる点でした。今回の経験を生かして次回以降私なりの形で色んな方にお知らせしアピールできたらいいなと思います。何気なく過ごしている中で「ちょっと考えてみようよ」という声かけときっかけをくれるこの HL は、自分の中に新しい価値観を見つけるチャンスであり、多様な価値観や特性を持った子どもたちと関わる教員が HL に参加することはとても大事なことだと思います。

そして今回は各スタッフのつながりや依頼により本の方々が決定しましたが、今後はイベントを本の方々も含めてあらゆる関係者と共同でつくりあげることが継続して活動していくためにも必要なのかなと感じました。企画段階で運営スタッフだけでなく本の方からも意見やアイデアをいただく機会を持つことで当日になって準備や配慮が至らないようなことが起きるのを防ぐこともできますし、イベントとしての方向性を運営スタッフと本の方とで共有できるとより充実したものにしていくことが可能だと思ったからです。

私自身が今回初めて HL に関わったので話し合っていく中でだんだんとビジョンがはっきりしてきたという感覚でした。今後できるかぎり他の HL にも参加して更に視野を広げていきたいです。

教職員の感想

ヒューマンライブラリー　振り返り

<読者としての感想>

　スタッフとして参加しましたが、「ヒューマンライブラリー」という言葉も初めて、何をするのか当日まで良くわからない状況での参加でした。「本」と対話をするという漠然としたことは分かるのですが、どんな風に話せば良いのか？それについての知識がないと聞いてはいけないのか？言ってはいけない言葉を使ってしまわないか･･･など正直楽しみというより不安の方が大きかったと思います。

スタッフの仕事もあり、一人（一冊の）本とだけ対話をしました。緊張していましたが、もう一人読者がいてだいぶ安心。本の方がとても優しい雰囲気の御嬢さんだったことで更に安心と言う感じで対話も楽しく、ほとんどが本の方からお話ししてくださったので質問に困ることもなくあっという間の 30 分でした。

もっと未知な世界の方のお話も聞いてみたかったと思いましたが一般の読者の方は一日中本との対話を楽しまれていた様子で開催して良かったと感じました。

<スタッフとしての感想・反省>

初めての開催なのでスタッフ全員の動きがスムーズではなかったと思いましたが、当日バタバタしながらもなんとか和やかに終わることができたと思います。本の担当と言っても外の仕事から戻ってきたらすでに対話が始まっていてご挨拶もできずお互いよくわからないままでした。

スタッフ同士も（特に学生さん）お名前も分からない、担当や所属も分からない状況だったのでスタッフ腕章に所属と名前があれば良かったと思います。

最後の懇親会はテーブルのセッティングなども人数が多くテーブルの形などに時間がかかりすぎたので予め考えておいた方が良いと思いました。

また、お菓子もなくなってしまったので、お弁当を半額にしてお菓子や飲み物を懇親会用に準備した方が良かったと思います。立派なお弁当でしたがゆっくり味わって食べる時間もなく、皆さんから見える場所で食べるのは落ち着かない状況でした。

受付ですが、当日練習できたことは良かったと思います。次回はもう少しすっきりした流れを考えるべきだと思いました。

<その他>

〇当日の仕事の分担をもう少し考えてほしかったです

→力仕事は若い学生さんにお願いするなど。。。肉体労働が多くかなり疲れました。

〇日本語検定試験と時間的にも同じだったので正門の案内係をやっていた時に声を掛けられるのは「試験会場はどこですか？」だけで群衆の中からヒューマンライブラリーに来た人を探すのはお互いに無理がありました。受付をしていても試験の休憩時間にカフェテリアがオープンしていると思い何人もの受験生が入ってきてその都度説明していました。

そして本当にヒューマンライブラリーに来た方にも間違えて「開いてません」と言ってしまっ

たり。。。失礼なことをしてしまいました。今後、開催日の他のイベントチェックも必要かと思われます。　以上

ヒューマンライブラリーに参加して

ヒューマンライブラリーは、企画の段階から打ち合わせに何度か参加させていただきました。そこで、趣旨に触れ、納得していたつもりではあったのですが、やはり体験してみないことには、今ひとつピンと来ませんでした。実際に開催が決まってから、周りの人をお誘いしようと思っても、うまく説明できずに困惑しておりました。

開催日当日は、スタッフとして受付回りの案内と書庫、会場のタイムキーパーもやって、催し全体の様子を見てまわることができました。

タイムキーパーで声をかけながら、時間になってもなかなか話が切れない読者の表情を見るにつけ、この催しの醍醐味がわかってきましたが、ちゃんと実感したのは、４回目の読書タイム。ブックの方と１対１でお話しする機会を持ったときです。

初めてここでヒューマンライブラリーの面白さと意義が実感できました。

難病の方のお話しで、たまたまこの病を得た知人がいたため、ある程度の知識はありましたが、このように詳しく闘病の状況を聞く機会が今までなかったため、息を飲む思いでうかがいました。このように、実際体験してみないと、この催しの面白さはなかなか伝わらないのが悩みどころだと思います。

１対１で聞くことは、始めは躊躇されましたが読者にとって、とても贅沢な時間だったと思います。

今後の課題は、いかにしてこの面白さを伝えるかというところにあるかと思います。

ヒューマンライブラリー　振り返り　桑原美希

今回初めてヒューマンライブラリーに参加致しました。
このような機会を提案頂いた岡先生に感謝致します。
また、休日にも関わらず協力頂いた“本”の方々、準備から参加したスタッフの皆様お疲れ様でした。実際に会って話すという臨場感は新鮮で、私にとって実りのある１日でした。
話すことによって伝わることは、身近に感じるという感覚を共有する機会でもありました。
マイノリティ、マジョリティという２分別ではなく、お互いが相手の気持ちになって考えてみることにより、それぞれの距離がグラデーションで繋がっていると感じました。
<スタッフとしての感想・反省>
初めての開催ということで、いろいろ準備していたつもりでも、想定外という事がありました。

“本”の方同士の紹介や当日の説明が少なかったので、もう少し前に集まってお互いのコミュニケーションを図れるようにして欲しいとの意見がありました。
最初の受付は予想に反しエントリーはスムーズで、“本”のセレクトに時間が掛かったため、次回は人員、場所ともにエントリーを少なくし、セレクトする方を多くするとスムーズに人が流れると思いました。
また、エントリー場所と会場が離れていたため情報が伝わりにくく、“本”の方も次にどのくらいの人数と話すのか？など情報が欲しかったなどの意見がありました。
今回は間に合いませんでしたが、次回からは情報の同期が出来るシステムを取り入れるとフレキシブルに行動が出来ると感じました。
懇親会は当日の参加者も含めての和やかな雰囲気で良かったと思います。
“本”で参加した皆さんも聞き手になれた機会だと思います。
食べ物・飲み物の量は少なかったので、懇親会用に予めキープしておけば良かったと反省しています。
今回はまずは 1 回やってみる！という挑戦の回でした。参加した人からは参加して良かったとの感想が多かったので、せっかくですから次回からは周囲に協力者を増やし、参加人数を増やせたらと思います。教員には教授会で広報、教員から学生へは授業などを通して、スタッフ・学生は SNS やポスターなどいろいろな方法で拡散できたら良いですね。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2016　感想

　この度はヒューマンライブラリーのスタッフにお誘い頂き、有難うございました。この場を借りて、お礼申し上げます。

　学芸大学で初めてのイベントということもあり、コンセプトを決める段階から時間がかかってしまった部分はありましたが、無事に成功で終わることが出来て本当に良かったと思います。私自身はあまりお役に立てずに申し訳ございませんでした。

今回のヒューマンライブラリーを通して私が感じたことは、「本」になって頂いた方々の生きる力の強さでした。困難や苦悩の中でご自身の可能性を信じて力強く生きていらっしゃる姿は、私がキャリア支援をする上で常に学生に伝えていることと重なり、共感を持ってお話を伺うことができました。また、ご自身の体験を理解しやすいように、噛み砕いてお話くださったことも、読者にとって大変貴重な経験だったと思います。東京学芸大学という教育大学ならではのヒューマンライブラリーを今後も実施していきたいです。

来年度以降実施の際は、「本」の方々同士が交流できる機会をぜひ増やして頂きたいと感じました。「本」になって下さっている方も読者になることが出来たり、イベント開始前に早めに集まり昼食をとりながら談笑する時間を作り交流を深めること等が良いのではないでしょうか。今回「本」になって頂いた方からも同様の意見がありましたので、検討していきたいです。また、講演の参加人数が少なかった点も集客する工夫が必要であると感じました。

ヒューマンライブラリーは、生きている「本」と「読者」との対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に対して開かれた社会の実現を目指す試みでとされており、地域の公民館や大学等で実施されています。SNS で簡単に繋がることができる今の時代に、対話を通じて相互理解を深める魅力を今回再認識しました。このような機会をより多くの方に体験して頂きたいです。

終わりに

ヒューマンライブラリーを運営して

留学生センター　岡　智之

今回、初めてヒューマンライブラリー（以下 HL）を開催し、主催者としては、何とかやりきったという思いがある。この報告書をまとめながら、やっと全体を振り返り、個人としての感想も述べられるようになった。

留学生センターの教員として、異文化理解、多文化共生教育の一環として、この HL を取り組み、まず、私の担当である在日外国人関係の「本」の方への理解が格段に深化したと思う。最近増えつつあるイスラム教徒の留学生に対応し、本学でも礼拝室を準備したり、カフェや授業でイスラム教についての紹介をしてもらったりしているが、まだまだ一般の理解は不足であることから今後もイスラム教徒留学生の話を直接聞く機会を設けることは必要だと思う。また、埼玉県川口市蕨市にコミュニティを作っているクルド人難民（申請者）の実態はほとんど知られていないので、今回直接クルドの方からのお話を聞けたのは、この学芸大の HL が初めてで意義があることだったと思う。また、「外国につながる人々の支援者」のにいさんには、「多文化共修科目」受講の学生と一緒に打ち合わせにも行ってお話を聞き、実際支援の現場を見せてもらい、支援者たちの意見も直接聞くことができて、学生の異文化理解に大きく役立ったと思う。こうした在日外国人に関する問題だけでなく、私のこれまであまり考えてこなかった分野のことも知ることができるようになった。特に、性分化疾患の〇〇さんとは、HL 研究大会でお会いし、学芸大の HL にも「本」としてまた一部スタッフとして参加していただくことになり、学生スタッフと一緒に、「読み合わせ」（事前の打ち合わせ）で、詳しいお話を聞く機会を得た。男女の両性器を持って生まれ過ごした思春期までの経験や、様々に悩みながら自分の性を決定していったというお話は、ショッキングでもあり、また、それを乗り越えて、みずから HL を積極的に担っていらっしゃる姿は、素晴らしいと感じるとともに、学生スタッフたちともすぐ友達のようにつきあっている姿にまた親しみも感じた。また、発達障がいの〇〇さんのお話は別の HL で「読者」として聞く機会があり、恥ずかしながら初めて発達障がいというものが何かを知った。学生の感想の中で「発達障がい」というのも、得意不得意の延長のようなもので、個性といった方が適切だという意見があったが同感だった。誰でも多かれ少なかれマイノリティの部分を持っているし、ある状況では誰でもマイノリティになりうるわけで、それを完全に個性とみることは難しいかもしれないが、多様性の一つとして捉えていくことはできるのではないかと思う。私個人としては今回の HL は主催者側だったため、すべての「本」参加者のお話を聞くことができなかったのは残念だった。特に、性的マイノリティの方々や難病の方のお話はまた別の機会でゆっくり聞くことができればと感じている。また、差別偏見を受けているマイノリティの方だけではなく、ユニークなキャリアを持った方というカ

テゴリーを入れることで、学生の今後の人生の進路を考える上でも役立ったのではないかと思う。今回の HL で多くの人が感じたことは、「本」の方々を○○障がい者や LGBT といったカテゴリーとしてではなく、ひとりの人間として理解が出来たということであろう。これが講演や書き物などでは味わえない HL の醍醐味であろう。

HL は、異文化理解教育の一環として、効果的な非常に意義のある取り組みであることは、今回のアンケートの結果などを見ても明らかであろう。今後、将来の教育と社会を担うより多くの学生の皆さんが参加していただけることを願っている。今回のイベントは、男女共同参画支援室、障がい学生支援室、学芸カフェテリアの教職員や学生の方々との協働で作り上げたものである。学芸大学の学生支援の部署がこのような形で協働してイベントを成し遂げたこと自体が初めてであり意義のあることだったと思う。また、生協や教職員組合には協賛団体になっていただき、留学生センターの先生方からも支援をいただいた。今後、今回の反省点に踏まえ、教職員や学生を交えた実行委員会を早期に立ち上げ、事前の「本」との交流など、年間を通じた取り組みへと発展させていきたいと考えている。より全学的に、また地域の皆様ともつながりながら、より多くの皆様が、ヒューマンライブラリーの醍醐味を味わい、楽しんでいただければ幸いである。

2017 年 2 月 1 日